

伊勢国府跡

1999年3月

鈴鹿市教育委員会



溝S D 23 から検出された倒壊瓦（東から）



土坑S K 24 軒平瓦出土状況（北から）



建物 S B 44・47（北東から）



溝 S D 41 軒瓦出土状況（東から）

例 言

1. 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市教育委員会が 1998 年度に実施した長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業のうち伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）の調査概要をまとめたものである。なお 1997 年度の調査概要についても調査区が隣接する関係上併せて収録した。

2. 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市教育委員会（教育長山下健）

調査指導 足利健亮（京都大学大学院教授）

川越俊一（奈良国立文化財研究所）

高瀬要一（奈良国立文化財研究所）

仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）

八賀晋（三重大学教授・1998 年度からは同名誉教授）

渡辺寛（皇學館大學教授）

文化庁文化財保護部記念物課

三重県教育委員会文化芸術課（1998 年度から同生涯学習課文化財保護室）

調査担当 鈴鹿市教育委員会事務局文化財保護課

組織及び構成

〔1998 年度〕

文化財保護課長 林銀哉

課長補佐 中森成行

主幹兼博物館準備室長 村山邦彦

博物館準備室 岡田雅幸

藤原秀樹

新田剛

杉立正徳

筒井昭仁（三重県埋蔵文化財センターへ派遣）

〔1998 年度〕

文化財保護課長 林銀哉

課長補佐兼埋蔵文化財係長 中森成行

埋蔵文化財係 岡田雅幸

新田剛

伊藤朋之

杉立正徳

3. 調査を実施した箇所及び面積は以下のとおりである。

Tab. 1 調査区の所在地と調査面積

年度	地区記号	調査回数	所在地	面積㎡
1997	6AFB－A	第8次	鈴鹿市広瀬町字長塚 1279 番地の 2	632
1998	6AFB－B	第10次	鈴鹿市広瀬町字長塚 1279 番地の 3, 1279 番地の 5	1014.2

4. 調査期間は 1997 年度が 10 月 16 日～2 月 10 日、1998 年度が 9 月 1 日～12 月 28 日である。
5. 1997 年度における現地調査は新田が担当し、辻公則（仏教大学学生）の補佐を得た。1998 年度は伊藤・新田が担当した。
6. 本書の編集は新田が担当した。執筆は I 章を伊藤が、その他を新田が分担した。なお第 8 次調査で検出された倒壊瓦については整理作業未完のため、別途報告するものとした。
7. 現地調査参加者は以下のとおりである。
 [1997 年度] 江藤琢子・江藤経子・小河きよ子・小河茂・小河清角・奥村のぶ子・駒田安重・鈴木三代子・鈴木義孝・豊田善久・仲見達雄・伴安治・水野ひさ子・水野豊
 [1998 年度] 江藤琢子・江藤経子・小河茂・小河清角・鈴木三代子・鈴木義孝・田代衛・豊田善久・仲見達雄・伴安治・水野ひさ子・水野豊・森明
8. 室内整理は前記執筆者の他、片岡貴美子・加城陽子・神田梢・杉本恭子・真鈴川千津子が実施した。なお辻公則からは多大なる協力を得た。
9. 遺構の種別を示す記号は以下のとおりアルファベットを用い、算用数字を付して遺構名としている。なお報告書及び遺物への注記には調査時に付した遺構名を踏襲している。

Tab. 2 年度別遺構名

年度 (次数)	S B ; 建物	S D ; 溝	S K ; 土坑	S P ; 柱穴
1997 (8)	27	21 ~ 23・25・26・36	24・25	28 ~ 35・79
1998 (10)	40・44・47		56・57	59 ~ 78・80 ~ 85

10. 座標は国土座標第 VI 系、方位は全て座標北を用いた。

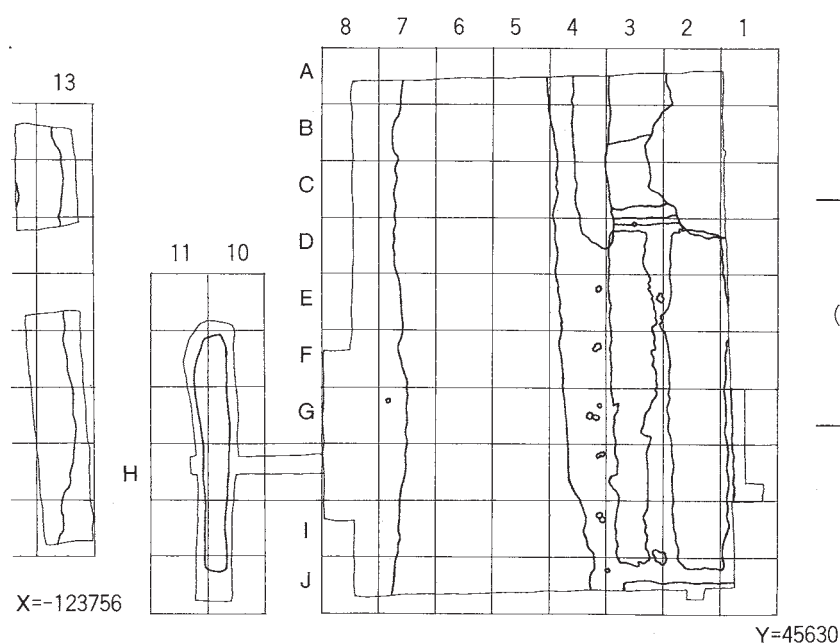


Fig.1 1997 年度のグリッド設定 (1:400)

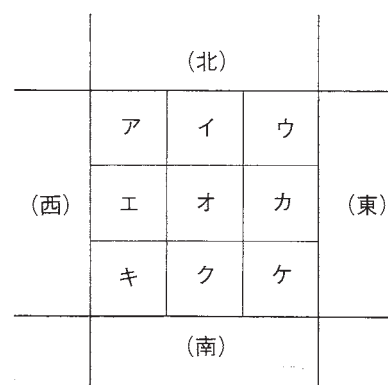


Fig.2 グリッドの細分割 (1:100)

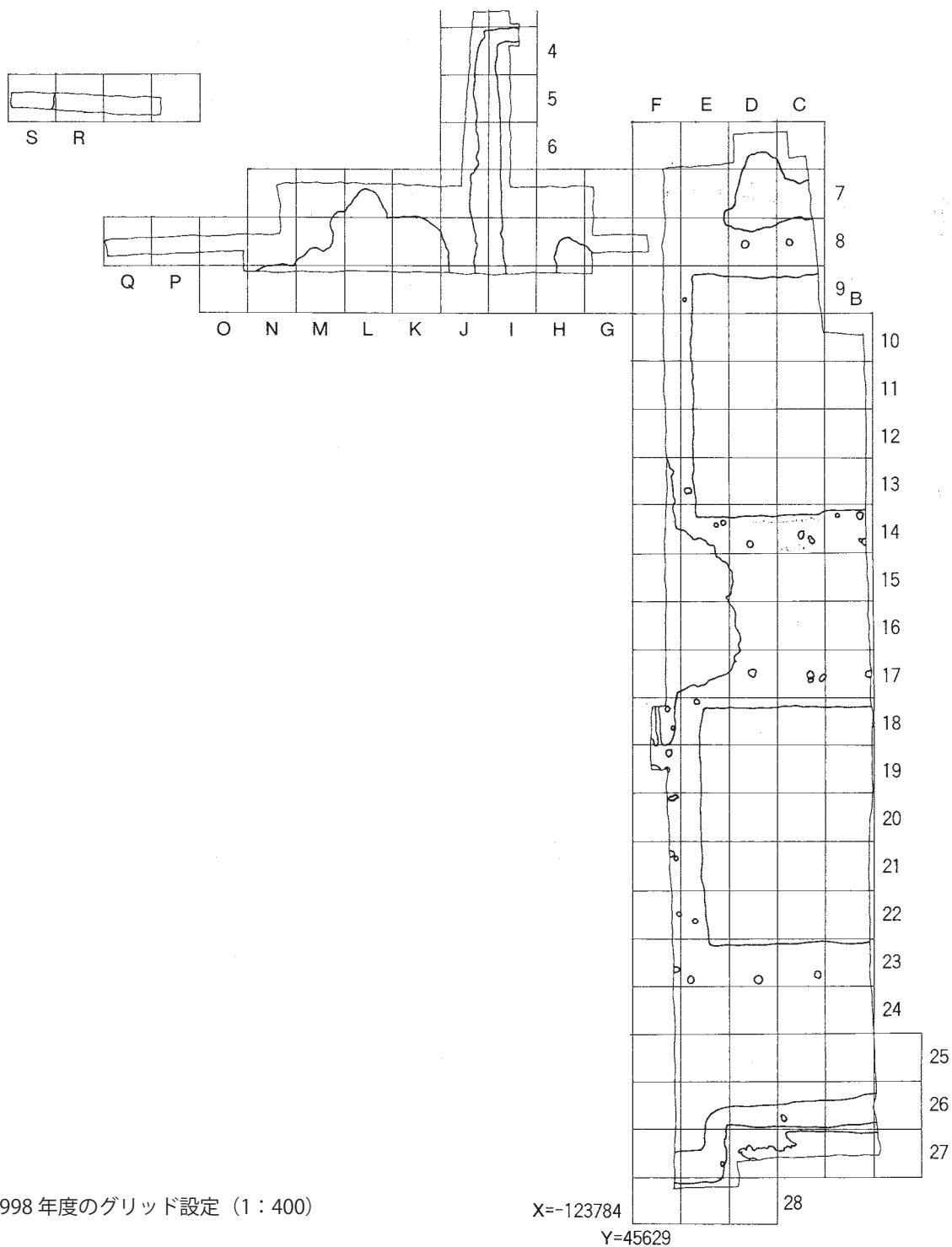


Fig.3 1998年度のグリッド設定 (1:400)

11. 調査区は、調査回数ごとに上記座標を用いて 3m グリッドに分割し、必要に応じてさらに 1 グリッドを 9 分割した。グリッド名は Fig.2 の細分記号を加え、例えば B - 3 - アなどのように表した。

12. 本調査にかかる遺物・図面・写真は全て鈴鹿市教育委員会が保管している。

調査並びに報告書刊行に際し、前記指導の先生方をはじめ、以下の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

麻生泰二・石毛彩子・伊藤克幸・伊藤久嗣・上原真人・岡田登・小澤毅・倉田直純・小池伸彦・小玉道明・駒田利治・坂井秀弥・佐藤信・鈴木三郎・谷本鋭次・西田健彦・林弘之・細野幸三・水橋公恵・前田清彦・山澤義貴・山田猛・山中章・山中敏史

本文目次

I . 伊勢国府跡調査・研究略史	1	4. 軒丸瓦・軒平瓦の型式分類	7
II . 調査の方法と経過	2	V. まとめ	13
III . 検出遺構	3	1. 遺構相互の関係と倒壊瓦	13
1. 基本層序	3	2. 建物の配置	13
2. 建物	3	3. 出土遺物と遺構の関係	15
3. 溝	4	4. 出土遺物から見る遺構の年代	16
4. 土坑	5	5. 出土瓦の検討	18
IV . 出土遺物	6	6. 政庁・南野地区における建物群との比較	18
1. 土器	6	7. 国府域と官衙ブロックの実態	19
2. 瓦	6	8. 今後の課題	19
3. その他の遺物	7	英文目次・要旨	21

カラー図版目次

1. 第 8 次調査	巻頭	2. 第 10 次調査	巻頭
溝 SD23 から検出された倒壊瓦		建物 SB44・47	
土坑 24 軒平瓦出土状況		溝 SD41 軒瓦出土状況	

挿図目次

Fig.1 1997 年度のグリッド設定	例言	Fig.5 軒丸瓦の型式	9
Fig.2 グリッドの細分割	例言	Fig.6 軒平瓦の型式	10
Fig.3 1998 年度のグリッド設定	例言	Fig.7 想定される建物配置	14
Fig.4 SB27 と SD23 瓦出土層下面の断面	5	Fig.8 伊勢国府跡出土の土器	17

表目次

Tab.1 調査区の所在地と調査面積	例言	Tab.5 軒平瓦型式一覧	11
Tab.2 年度別遺構名	例言	Tab.6 地点及び遺構別軒瓦出土点数	12
Tab.3 土器一覧	8	Tab.7 報告書抄録	65
Tab.4 軒丸瓦型式一覧	11		

図版目次

Plate 1 周辺の遺跡 (1 : 100,000)	23	Plate 17 軒丸瓦 (1 : 4)	42
Plate 2 調査区位置図 (1 : 5,000)	24	Plate 18 軒平瓦 (1 : 4)	43
Plate 3 調査区位置図 (1 : 1,000)	25	Plate 19 軒平瓦 (1 : 4)	44
Plate 4 建物 S B 27・大溝 S D 23 土層断面図 (1 : 50)	26	Plate 20 軒平瓦 (1 : 4)	45
Plate 5 遺構配置図 (1:250)	27	Plate 21 鬼瓦 (1 : 4)	46
Plate 6 建物 S B 27・大溝 S D 23・溝 S D 21・22・ 土坑 S K 24・25 平面図 (1 : 100)	29	Plate 22 丸瓦・文字瓦 (1 : 4)	47
Plate 7 溝 S D 26・36 平面図 (1 : 100)・ 溝 S D 26 断面図 (1:50)	31	Plate 23 平瓦・文字瓦 (1 : 4)	48
Plate 8 建物 S B 44・47 土層断面図	32	Plate 24 第 8 次調査区全景 / 第 10 次調査区全景	49
Plate 9 建物 S B 40・44・溝 S D 41 ~ 43 平面図 (1:100)・溝 S D 41・42・ 足場穴土層断面図 (1 : 50)	33	Plate 25 大溝 S D 23 倒壊瓦 / 大溝 S D 23 倒壊瓦	50
Plate 10 建物 S B 47・土坑 S K 56・溝 S D 55 平面図 (1 : 100)・土坑 S K 56・溝 S D 55・足場穴断面図 (1 : 50)	35	Plate 26 大溝 S D 23 倒壊瓦 / 大溝 S D 23 倒壊瓦	51
Plate 11 土坑 S K 57・溝 S D 58 平面図 (1 : 100)・ 土層断面図 (1 : 50)	36	Plate 27 建物 SB27/ 土坑 SK24 瓦出土状況	52
Plate 12 土坑 S K 24・大溝 S D 23・溝 S D 21 平面図 (1 : 100)・溝 S D 21 土層断面図 (1 : 50)	37	Plate 28 土坑 S K 24・25・溝 S D 21 瓦出土状況 / 大溝 S D 23 瓦出土状況	53
Plate 13 土坑 S K 24・大溝 S D 23・溝 S D 21 土層断面図 (1 : 50)	38	Plate 29 大溝 S D 23 作業風景 / 足場穴 S P 29/ 現地説明会 / 溝 S D 26 土層断面 / 建物 S B 27 掘込 地形 / 大溝 S D 23 土層断面 / 大溝 S D 23 土層断面 / 溝 S D 36 検出状況	54
Plate 14 大溝 S D 23 倒壊瓦出土状況 (1 : 40)	39	Plate 30 溝 S D 41 瓦出土状況 / 溝 S D 41 瓦出土状況	55
Plate 15 土坑 S K 24・溝 S D 41 瓦出土状況 (1 : 50)	40	Plate 31 土坑 S K 57 瓦出土状況 / 土坑 S K 57 土層断面	56
Plate 16 土器 (1 : 4)	41	Plate 32 土坑 S K 57/ 大溝 S D 23	57
		Plate 33 大溝 S D 23 土層断面 / 土坑 S K 56・溝 S D 55	58
		Plate 34 溝 S D 41 ~ 43/ 建物 S B 44・47	59
		Plate 35 大溝 S D 23・溝 S D 21/ 溝 S D 21	60
		Plate 36 土器	61
		Plate 37 土器・軒丸瓦	62
		Plate 38 軒平瓦	63
		Plate 39 丸瓦・平瓦・文字瓦・鬼瓦	64

I . 伊勢国府跡調査・研究略史

長者屋敷遺跡（伊勢国府跡）は安楽川左岸の標高約 50m の段丘上に位置し、瓦の分布から知られる遺跡の範囲は東西 600m・南北 800m である。現在の行政区ではその大部分が鈴鹿市広瀬町に含まれ、一部亀山市能褒野町にも及んでいる。膨大な量の古瓦や随所に残る建物基壇により古くから遺跡の存在が知られ、すでに 18 世紀には、長者伝説とともに古の屋敷跡として認知されていたことが碑文や古籍等により知られる。かつて随所に見られた建物跡（鈴木敏雄 1933）の多くは開墾等により消滅し、現在では矢下地区（政庁跡）などに残るのみであるが、市街化調整区域であることが幸いして遺跡の景観は比較的良好に保たれている。

一方伊勢国府の所在地として専ら周知されてきたのは、当遺跡から鈴鹿川・安楽川を挟んで南南東へ約 3km 離れた鈴鹿市国府町であった。鈴鹿市域で初めて国府跡の調査を行ったのは京都大学の故藤岡謙二郎博士らで、1956 年歴史地理学的な見地から国府町においてトレンチ調査等を実施し、方八丁域の想定を行った。その際対岸における長者屋敷遺跡の存在を知った藤岡らは、翌年には基壇状の高まりが明瞭に残る 2 地点において調査を実施している。A 地点（南野地区）においては礎石建物を検出し、B 地点（矢下地区・政庁跡）については土層断面の記録や測量調査を実施し、その結果遺跡北端の通称「金藪」を「代表的建物」、B 地点を「羅城域の性格を備えたもの」としたうえで、当遺跡を軍団を兼ねた初期国府跡と結論づけた（藤岡謙二郎他 1957）。

以後近年にいたるまで発掘調査がなされることはなかったが、鈴鹿関とのからみで国府跡やその移転の問題が論じられたり（木下良 1971）、B 地点が政庁跡の候補地として示されるなど（阿部義平他 1986）、当遺跡に関する理解は徐々に進展を見せた。なかでも村山邦彦氏によって 1988 年から 3 ケ年にわたり実施された分布調査結果（村山邦彦 1992）はのちの計画調査に大いに役立つこととなった。こうした先学による研究を基礎として鈴鹿市教育委員会では 1992 年から当遺跡の発掘調査を開始した。

第 1 次調査は藤岡らが礎石建物を調査した南野地区や、瓦が密に分布する荒子及び長塚地区で実施された。南野地区の礎石建物は桁行 8 間以上であることが確認され、長塚地区では礫敷遺構が検出された。

第 2 次調査（1993 年度）は、建物基壇が残存する矢下地区において実施され、奈良時代後半の伊勢国府政庁であるとの確信が得られた。以後第 4 次調査（1995 年度）まで政庁域の調査が継続され、瓦葺礎石建物からなる主要殿舎の構造と政庁域の東西規模が明らかになる一方、基壇化粧の欠如も注目された（新田剛 1994・藤原秀樹他 1995・新田剛 1996）。

正殿を中心に後殿・東西脇殿が軒廊で結ばれ、築地塀で囲繞される建物配置は近江国庁に極めて類似し、両者の詳細な比較も試みられている（辻公則 1996）。調査の進展に伴い、軒瓦をめぐる議論も活発となり（竹内英昭 1993・岡田登 1995）、平城宮 6719 A 型式との同範関係も検討された（山崎信二 1994）。

1996 年度の日本考古学協会三重大会では国府がテーマの一つに選ばれ、シンポジウムにおいてこれまでの成果が披露された（山澤義貴 1996）。

第 5・6 次調査（1996 年度）は緊急調査で、遺跡北辺から国府と同時期の竪穴住居が検出され（杉立正徳 1997）、三重県埋蔵文化財センターによる緊急調査（1994・1995 年度）では、20 条余りの溝をもとに一辺 120m を基本とした方格地割が想定された（宇河雅之 1996）。

土地利用上の制約から政庁域南限や脇殿の南北規模など重要な課題が積み残されたまま、第 7 次調査（1996 年度）では第 1 次調査区の隣接地において調査区が設けられた。その結果礎石建物の基礎地形と掘立柱建物が各 1 棟検出された（新田剛他 1997）。

第 7 次調査と前後して、これまで積極的に論じられることのなかった当遺跡出土土器に関する検討も行われ、長者屋敷遺跡における国府関連遺構の年代について疑義が唱えられている（水橋公恵 1997）。

道路改良に伴う第 9 次調査（1997 年度）では政庁南門付近が調査され、南築地内溝や版築による硬化面が検出された（新田剛 1998）。

Ⅱ．調査の方法と経過

1. 遺跡の概況

南北 800m・東西 600m に亘って遺物が散布する伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）は大部分が植木栽培などの耕地として利用されている。政庁は、第 2 次～第 4 次調査により遺跡の南端中央の矢下地区において確認された。政庁跡は南半が戦後の耕地整理のため大きく改変されているものの、正殿・後殿と脇殿の一部は山林となっており、基壇の保存状態は極めて良好と云える。遺跡の北から北西にかけては戦時中の軍事施設やその後の耕地整理により大きく改変を受け、旧状を留めている部分は「金藪」などの島状に残る山林に限定される。政庁から遺跡の中程にかけての長塚地区や南野地区などは、県道辺法寺加佐登停車場線によって分断されているとは云え、大規模な開発の影響を受けることが少なく、正方位に近い方形の地割を留めている。

1997・1998 年度の調査地点である長塚地区は、政庁の北北西約 250m に位置し、南野地区における 1996 年度の調査区からは約 250m 西に離れる。南野地区とともに遺跡中央を東西に貫く農道に沿った瓦集中地区を形成し、伊勢国府跡では政庁と並んで瓦の分布がとくに濃厚な地点である。軒瓦が多く散布する地点としても知られることから、矢下政庁とは異なる時期の政庁跡である可能性も指摘されてきた。現地踏査では、場所によって土壌の乾燥の度合いが異なる部分が観察されており、建物跡の残存が期待されていた。さらには三重県埋蔵文化財センターにより指摘された方格地割の検証も可能な地区である。2. 第 8 次調査（1997 年度）

1997 年度の第 8 次調査では、約 1,000 m² の畑を借り受け、1 m 幅の試掘トレンチを東西に 3 条設定したのち、溝や基礎地形が検出された部分について面的に拡張し、最終的には畑の東半分を主たる調査区とすることになった。

溝 S D 21・22・26・S K 24・25・足場穴 S P 79 についてはほぼ底まで掘り下げ、基礎地形 S B 27・大溝 S D 23・溝 S D 36 は一部掘削し、足場穴 S P 28～35 は遺構検出のみに留めた。S D 23 で検出された倒

壊瓦や S K 24 で集中的に出土した軒平瓦については図面を作成し、個体ごとに番号を付して取り上げた。

3. 第 10 次調査（1998 年度）

第 10 次調査は、第 8 次調査区の東及び北の「L」字状の畑地約 2,000 m² を対象に実施した。第 8 次調査同様幅 1 m のサブトレンチにより遺構の広がりを確認し、建物の基壇基礎が 3 棟分確認された 8 次調査区の東部分と S D 23 などの続きが押さえられる北部分の一部を面的に広げることになった。

溝 S D 21・26・41～43・55・大溝 S D 23・土坑 S K 24・56 についてはほぼ完掘し、土坑 S K 57・溝 S D 58・足場穴 S P 59～78 は一部ないしは中途まで掘り下げた。検出された基礎地形のうち S B 44・47 は遺構の断ち割りを実施し、掘り込み地形の堆積状況や底面の観察を行った。S D 41 下層から集中出土した瓦については出土状況の図化を実施した。

4. 遺構と調査グリッド

遺構名は、第 5・6 次調査を除いて、第 1 次調査以来遺構の種別ごとに連番としてきたが、第 8 次調査から遺構の種別を問わず連番とすることにした。柱穴などの小遺構については別途名称を付与することがあったが、当遺跡では検出例が極端に少ないため、当面は他の遺構同様連番とすることにした。

調査区内におけるグリッドの設定については第 4・7 次調査から 3m グリッドを採用しており、遺物の取り上げに際しては 1 グリッドをさらに 9 分割した小グリッドも併用している（Fig.2）。ただしグリッドの命名法については調査ごとに異なり、報告書に明記されることもなかった。次数を重ねるごとに煩雑になり、このままでは混乱を来しかねない。

したがって遺跡全体を統一的にカバーする調査グリッドの設定が望まれる。第 8・10 次調査については図示したとおり調査区ごとの設定となっているが（Fig.1・3）、次回からは改善される予定である。

Ⅲ. 検出遺構

1. 基本層序

基本層序及び層厚は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（耕作土）。20～25 cm。

Ⅱ層：黒色土。いわゆるクロボク。5～20 cm。

Ⅲ層：漸移層。5 cm。

Ⅳ層：黄褐色砂質シルトの基盤層。

場所によってはⅡ層・Ⅲ層が存在しないところがある。プライマリーな遺物包含層や旧地表は残存しておらず、Ⅰ層を除去すれば遺構面が現れる。したがって遺構検出はⅠ層を除去したⅡ層、Ⅲ層ないしはⅣ層上面において実施した。なお第10次調査区（6 A F B - B 区）ではほぼ全面にわたってトレンチャーによる耕作痕が遺構面を突き抜け、深部に及んでいる。

2. 建物

6 A F B - A - A 区東辺及び6 A F B - B - A 区から瓦葺礎石建物の基礎地形（業）が4棟分検出された。いずれも地上部分は全く残存せず、掘り込み地形がなされた地下部分のみ痕跡をとどめる。

建物 S B 27（P L 4・5・6・9） 6 A F B - A - A 区東辺において検出された南北棟と考えられる建物で、棟方向はN 1° Wである。基礎地形は大きく北西・北中央・北東・南の4ブロックに分かれ、全体としては東西 9.1m・南北 19m 以上に及ぶ。うち北西・北中央ブロックについてはほぼ全面が検出され、南ブロックはごく一部が確認されただけである。本来は一体のものであったのが、とくに深く掘り込まれた部分のみ数ブロックに分かれて残存したものと考えられる。

北西部分は溝 S D 21 に、北中央部分は土坑 S K 2 4 にわずかに切られ、東辺には溝 S D 58 が平行して近接する。掘り込み地形の深さは検出面から最大で 30 cm を測り、最深部の標高は 50.03m である。版築はクロボク主体ではあるものの、おおむね縞状を呈し（P L 4）、掘り込まれた底面は著しく凹凸をなす。基礎地形中に瓦片は含まれない。

足場穴 S P 28～31・33～35・60・74・75・77・78・81（P L 5・6・9） 建物 S B 27 の北及び西から

は 30～50 cm 離れて足場穴が7箇所検出された。同じく東側において検出された S P 60・74・75・77・78・81 も足場穴と考えられる。径は 20～44 cm である。S P 28・60・74・75・77・78・81 は全掘ないしは半掘し、それら以外は平面プランの確認のみを行った。S P 29・74・75 からは瓦片が出土した。足場穴それぞれの間隔は S P 29 - 30 が 3.2m, S P 30 - 31 が 3.3m, S P 31 - 33 が 2.6m, S P 33 - 34 が 3.5m, S P 34 - 35 が 2.7m, S P 81 - 60 が 2.9m, S P 60 - 77 が 2.9m, S P 77 - 78 が 3.8m, S P 78 - 75 が 3.5m, S P 75 - 74 が 3.5m である。

建物 S B 40（P L 5・9） 6 A F B - B - A 区南端においてごく一部が検出された。西端部分の残りが悪く、本来の基礎地形の平面形は損なわれている。東西棟と考えられ、建物に伴うと見られる溝 S D 41・42・43 が北辺及び西辺に鉤の手にめぐる。基礎地形中に瓦片は含まれない。S P 82・83 は足場穴の可能性がある。基礎地形の西辺は、後述する建物 S B 44・47 の西辺と一致せず、1.2m 東に位置する。建物 S B 44（P L 5・8・9） 6 A F B - B - A 区の中央から検出された。東半部分は調査区外となる。基礎地形の規模は南北 15m で、東西棟と考えられ、棟方向は N10° W である。基礎地形西辺と建物 S B 27 東辺との間隔は 2.5m, 建物 S B 40 との間隔は 11.5m である。東西・及び南北に 1m 幅のサブトレンチを設定し、基盤層まで断ち割り調査を実施した。検出面から底面までの深さは 58 cm で、最深部の標高は 49.86m である。基礎地形の断面形状は特異で、クロボクと黄褐色土が交互に埋め戻されてはいるものの、大きく傾き、水平な縞状の版築工法は一切認められない。掘り込み地形の底面は場所によっては激しい凹凸をなす（P L 8・9）。基礎地形中に瓦は含まれない。

足場穴 S P 45・46・59・63・65・57（P L 5・9）

径は 30～56 cm である。S P 45・46・63・65・67 は基礎地形から 1.7～1.8m 離れ、S P 59 は 0.5m 離れる。全て 5 cm ほど掘り下げを実施し、さらに S P 45・63 については半裁した。S P 45・46・63・65・67 から

は瓦片が出土した。それぞれの足場穴の間隔は S P 45 - 46 が 3.7m, S P 63 - 65 が 3.6m, S P 65 - 67 が 3.6m である。

建物 S B 47 (P L 5・8・10) 6 A F B - B - A 区の北半から検出された。東半部分は調査区外となる。基礎地形の規模は南北 14.9m で、東西棟と考えられ、棟方向は N 1° W である。基礎地形西辺は建物 S B 44 と一致し、南辺と S B 44 北辺との距離は 11.8m である。S B 44 同様東西・及び南北に 1m 幅のサブトレンチを設定し、基盤層まで断ち割り調査を実施した。検出面から底面までの深さは 46 cm で、最深部の標高は 50.01m である。版築は S B 44 と異なり、クロボクを多く含むものの層状をなす。南北サブトレンチにおいてところどころに見られる深部は柱の位置に対応するものと見られる。

足場穴 S P 49 ~ 54・68 ~ 72 (P L 5・10) 径は 28 ~ 47 cm である。S P 53・54・68 ~ 72 は基礎地形から 1 ~ 1.8m 離れ、S P 49 ~ 52 は 0.2 ~ 0.4m 離れる。全て 5 cm ほど掘り下げを実施し、さらに S P 53・72 については半裁した。それぞれの足場穴の間隔は S P 53 - 54 が 2.7m, S P 70 - 72 が 3.9m, S P 68 - 70 が 3.3m である。

3. 溝

大溝 S D 23 (P L 4・6・12・13・14) 6 A F B - A - A 区及び 6 A F B - B - B 区から検出された。S B 27 の西に平行して隣接する南北溝で、S B 27 の基礎地形西辺との間隔は 0.9 ~ 2.7m である。幅 8.3 ~ 10.6m, 深さ 0.9m を測り、検出長は 37m で、方向は N 1° W である。北端は 6 A F B - B - B 区内で収束し、不規則な形状をなす。溝の埋土は 3 層に大別される。上層はしまりがなく、近世陶器片が出土した。中層からは少量の土器類と大量の瓦類が南半を中心に出土した。下層にはごく少量の瓦類を含む。

南半中程からは葺きあしを留める瓦列が検出された。総点数は 324 個体で、その内訳は丸瓦 50・平瓦 273・軒丸瓦 1 である。平瓦部分は 23 列認められ、1 列あたりの残存枚数は 2 ~ 12 枚である。大部分の平瓦は広端を西に向け、丸瓦は玉縁を西に向ける。平瓦には広端を東に向けるものが 4 点見られる。(P L 14 ▲印)。軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦も出土したが、

瓦列に組み合うものはなかった。丸瓦が密集する中程部分を境としてやや瓦列の向きが異なることからひねりが加えられた状況が読みとれる。元来の屋根の状況がどの程度反映されているかは不明であるが、出土状況から判断する限り平瓦の重なり具合はいわゆる「2 枚重ね」に近いものと推定される。

溝 S D 21 (P L 6・12) 6 A F B - A - A・6 A F B - B - B 区から検出された南北溝で、基礎地形 S B 27 の一部及び溝 S D 22・土坑 S K 25 を切る。総延長は 29m で、北端は東に曲がる。幅は 1.4 ~ 2.0m, 深さは 0.3 ~ 0.6m で、方向は N1° W である。溝の東の肩は S B 27 西辺の延長線上に位置する。埋土は大きく 2 層に分かれるが、北半では下層のみが残る。埋土からは丸瓦・平瓦が出土した。

溝 S D 22 (P L 6) S B 27 の北に 0.3 ~ 0.5m 離れて位置する東西溝で、S D 21・S K 24 に切られる。幅 29 ~ 42m・深さ 14 cm で、クロボク主体の埋土にしまりは無い。

溝 S D 26 (P L 7) 調査区西辺で検出された南北溝で、幅は 2.2 ~ 2.5m・深さ 0.5m である。S D 23 から 18m 離れ、S D 36 とは芯々で約 9m 離れる。側縁は整わず、連結土坑状をなす可能性がある。埋土からは丸瓦・平瓦片が出土した。

溝 S D 36 (P L 7) S D 26 と S D 23 の間から検出された南北溝である。長さ 12.5m・幅 1.1 ~ 1.8m・深さ 0.5m で、一部掘り下げた他は、平面確認のみに留めた。瓦片を少量含み、西から黄褐色土が流れ込む。調査したトレンチ以外の部分に不連続に続く可能性も残る。

溝 S D 41 ~ 43 (P L 9・15) 6 A F B - B - A 区南端で検出された。S B 40 の北辺及び北西部分を取り巻くようにめぐり、さらに西へ屈曲する。S D 41・42 は幅 1.2 ~ 2.4m・深さ 0.5 ~ 0.6m, S D 43 は幅 2.1m・深さ 0.4m である。S D 41 の埋土は上・中・下層に大別され、下層を中心に多くの瓦片が出土した。上・中層からは須恵器・文字瓦・鬼瓦・鉄滓が出土し、下層からは完形もしくは完形に近い軒瓦 4 点が溝底面近くで検出された。溝内からは足場穴様の小柱穴が 4 個検出された。

溝 S D 55 (P L 10) S B 47 の北で 2.8 ~ 3.5m 離れ、て検出された東西溝。幅 2.5m・深さ 0.3m で、方向

は W13° S である。S K 56 との切り合い関係が判然とししないのは、S D 55 埋没以前に S K 56 が掘削されたことによるものと思われる。埋土からは軒平瓦片を含む瓦片が出土した。

溝 S D 58 (P L 9) S B 27 の東に平行して隣接する南北溝で、南端の一部のみ掘り下げた。幅 1m・深さ 0.6m である。埋土からは土師器・須恵器・瓦片が出土した他、内部には足場穴状の小柱穴が認められた。

4. 土坑

土坑 S K 24 (P L 6・12) S B 27 の北に位置する。不整形の土坑。S B 27 の一部及び S D 22・S K 25 を切る。深さは 0.5 ～ 0.7m で、埋土中程を中心に瓦片が出土した。S K 25 を切る西端付近からは完形に近い軒平瓦 I A 3 型式 7 点が集中出土した (P L 15)。北西部分の底に幅 24 cm 程の溝がある。

土坑 S K 25 (P L 6・15) S B 27 の 1.1 m 北で検出された。S D 22 に平行する溝である可能性もある。西端は S D 21 に、東端は S K 24 に切られる。深さ 25 cm で、ほぼクロボクのみから成る埋土からは少量の瓦片が出土した。

土坑 S K 56 (P L 10) S D 55 の北辺に連結する不整円形の土坑。深さ 33 cm で、埋土には少量の瓦片を含む。

土坑 S K 57 (P L 11) S B 44・S B 47・S B 27 に囲まれ、S D 58 に連結するように設けられた不整半円形の土坑。深さ 0.3 ～ 0.7m で、最大長は約 9m である。埋土はクロボクと黄褐色砂質シルトが層を成し、瓦片等を多く含む層は埋土中程に 2 層認められる。土師器・須恵器・軒瓦・鬼瓦・文字瓦なども出土した。

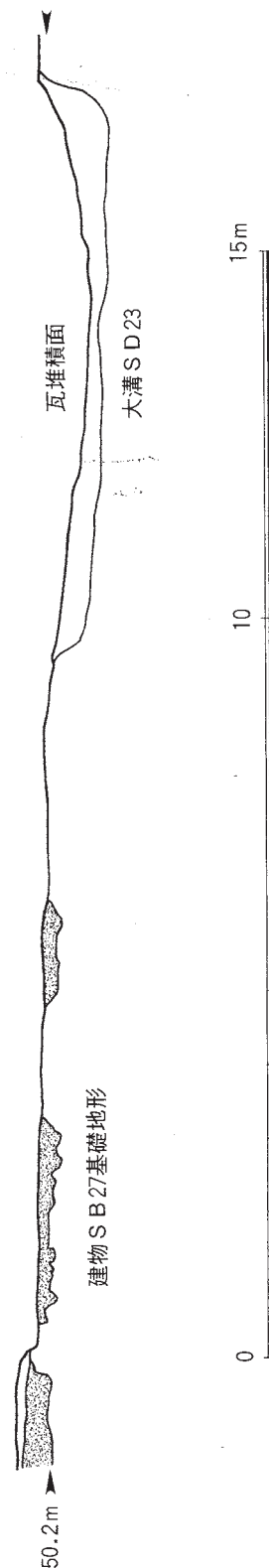


Fig. 4 S B 27 と S D 23 瓦出土層下面の断面 (1:100)

IV. 出土遺物

1. 土器

土器の出土量はこれまで同様少なく、第8次調査で整理箱に3箱、第10次で1箱である。大部分は土師器・須恵器の破片資料で、大溝S D 23・溝S D 42・溝S D 58・土坑S K 57などから出土したものである。建物の建設時期を知る上で重要となる基礎地形・足場穴・溝底面からの土器類の出土はなかった。

古代以外の土器では第10次調査区の包含層から縄文土器片が、第8次調査区の大溝S D 23の上層から近世陶器が出土している。

土師器甕（P L .16-1） 小型平底の甕である。口縁単部は端部は、短く上方へつまみあげられる。体部外面上半はハケメ、下半はケズリ調整され、体部内面はケズリ調整される。

須恵器坏A（P L .16-2～4） いずれも底部は回転ヘラケズリされ、腰部に稜を持つ。

須恵器坏B（P L .16-5～9） 小型のもの（5）と中・大型のもの（6～9）がある。6～8は体部が直線的で、5・9は腰部が丸みを帯びる。いずれも高台は底部の縁辺部に付き、内端接地の角高台のもの（5～7）や外方へ踏ん張ったもの（9）がある。5・9の底部外面にはヘラ記号があり、9は「七」と判読できる。

須恵器蓋（P L .16-10～17） 中型のもの（10～13）と大型のもの（14・15）がある。天井部から口縁部にかけてあまり屈曲することなく、丸みを帯びるもの（11・12）や口縁端部が大きく屈曲するもの（13・14）がある。16は扁平なつまみ部分である。

図示したもの以外では、S D 23上層・S D 41上層・S D 43上層・S K 57から土師器片・須恵器片が、S K 24・S K 56・S D 42から土師器片が、S D 26から須恵器片が出土している。S D 23出土の土師器坏片には放射状暗文を有するものがある。

2. 瓦

第8次調査では土嚢袋に1,000袋、第10次では260袋出土した。大部分は溝や土坑など遺構出土のものである。建物の倒壊状況を留めて出土した大溝S D 23の丸瓦・平瓦をはじめ、ほとんどが整理途上であ

るため、それらについては整理が完了したのち別途検討するものとし、ここでは軒瓦・鬼瓦・文字刻印瓦と丸瓦・平瓦の一部のみ報告する。なお軒丸瓦・軒平瓦の型式内容は後述のとおりである。

軒丸瓦（P L 17-18～23）

I A 1型式（18） 大溝S D 23上層出土。淡橙褐色を呈する。同遺構で他にもう1点あり、土坑S K 24・S K 57に各1点ある。

I A 3型式（20） 溝S D 41下層出土で、完形。瓦当にはひずみがあり、須恵質であるものの軟質。丸瓦部の凸面・凹面は側縁と平行に調整される。

I A 5型式（19） 大溝S D 23上層出土。軟質。

I A 9型式（22） 大溝S D 23上層出土。須恵質で、焼成良好。第8次調査で初めて確認された。

I B 1型式（21） 土坑S K 57出土。須恵質で、焼成良好。中央珠点はほとんど残存しない。

I C 1型式（23） 土坑S K 57出土。橙褐色を呈し、軟質。第10次調査で初めて確認された。他に第10次調査区における採集資料が1点ある。

軒平瓦（P L 18～20・24～28）

I A 1型式（27） 土坑S K 24出土。その他大溝S D 23から1点、土坑S K 57から2点出土している。

I A 2型式（24） 溝S D 41下層から出土した4点のうちのひとつ。完形で、須恵質。その他大溝S D 23から2点、土坑S K 24から1点出土している。

I A 3型式（25） 土坑S K 24から集中出土した7点のうちのひとつ。その他大溝S D 23から1点出土している。いずれも完形に近い。いずれも軟質。

I A 4型式（28） 土坑S K 57出土。

I A 6型式（26） 溝S D 41下層から出土した2点のうちのひとつ。その他大溝S D 23から3点、土坑S K 24から1点、土坑S K 56から2点、土坑S K 57から2点、足場穴SP45から1点出土した。

鬼瓦（P L 21-29～34） いずれも同范資料と思われる鬼面文鬼瓦。数個体のものが含まれる。29・30・32・34は土坑S K 57、31は大溝S D 23、33は溝S D 41出土。29・30・33・34は硬質。厚さはおおむね25～70mmであるが、眉間に釘穴を有し、眼球は半円状

に飛び出る。巻き毛は片側に 8 単位見られ、全体的に彫りは深い。鼻は大きく、鼻孔はあとでくりぬかれている。側面及び裏面はヘラケズリされる。第 7 次調査の南野地区で出土した 1 点も加えて想定される全体形は P L 21 右下図のとおりとなる。上部は丸みを帯びた駒形となり、口は上歯・上牙のみを表現したものと推定される。

丸瓦 (P L 22-35・36) 全て玉縁式で、凹面縁辺部に調整があるもの (35) とないもの (36) がある。35 は溝 S D 41 出土で、長さ 355 mm・幅 181 mm・高さ 92 mm・厚さ 19 mm。36 は溝 S D 21 出土で長さ 362 mm・幅 182 mm・高さ 104 mm・厚さ 19 mm。凸面は胴部・玉縁部ともに短軸方向に調整される。36 は玉縁側に半裁しかけた痕跡を有する。なお政庁で認められる小型で凸面に長軸方向の調整を有するものはない。

平瓦 (P L 23-41) 41 は SD43 出土で、長さ 357 mm・厚さ 21 mm。側縁は 3 面にわたり面取り調整され、凹面は横方向に調整される。

文字瓦 (P L 22-37～40, P L 23-42) 37～39 は土坑 S K 57, 40 は溝 S D 41, 42 は包含層出土。37～40 は丸瓦の凸面に、42 は平瓦の凸面に押印されたもので、いずれも印面は円形である。37 は「中」に似た記号、39・40 は「人」の陰刻、42 は「宿」で、38 は 2 箇所押印されるものの文字・記号は判読できない。いずれも過去に出土例のあるものである。

3. その他の遺物

溝 S D 41 上層から鉄滓が出土した。

4. 軒丸瓦・軒平瓦の型式分類

伊勢国府跡出土軒瓦の型式については過去の報告等で触れられてきたが、8～10 次調査における資料の増加により、訂正・追加の必要が生じてきた。そこで既出型式の内容に一部訂正を加えつつ、新規に設定される型式も含め、再確認したい。

型式名の表記は、第 3 次調査以来ローマ数字・アルファベット・アラビア数字を組み合わせて行ってきた。例えば「軒丸瓦 I A 1 型式」などのようにである。最初のローマ数字は瓦当文様の種類を表し、アルファベットはその細別を表す。末尾のアラビア数字は、細別型式群内での識別のための記号である。

したがってこれら 3 種の記号が全て揃って初めて型式名となる。軒丸瓦と軒平瓦に共通の記号を用いて

いるが、それぞれ同じ記号となっても相互のセット関係等を表すものではない。

伊勢国府跡の周辺には伊勢国分寺跡や瓦窯跡等同範資料を有する遺跡がある。今後これらの資料を統一的に理解する必要が生じる可能性があることから、最低河曲郡及び鈴鹿郡内における古代の軒瓦については全てを網羅した統一表記を行うべきであろう。

そこで国府跡以外にみられる瓦当紋様も加味した上で、型式名に使用する記号の内容は下記のとおりとしたい (註 1)。

[軒丸瓦]	I …重圈文	A…三重圈文
		B…三重圈文 + 中心珠点
		C…四重圈文
II …蓮華文		A…単弁十葉
		B…単弁十二葉
		C…単弁十四葉
		D…複弁八葉
		E…複弁十二葉
[軒平瓦]	I …重廓文	A…二重廓文
		B…外区珠文
II …唐草文		A…外区素文
		B…外区珠文
III …重弧文		A…四重弧文
		B…三重弧文

伊勢国府跡の軒瓦型式について新たに発見されたものも含めて再確認すれば、別表 (Tab.4・5) のとおり軒丸瓦 11 種類・軒平瓦 7 種類となる。軒丸瓦は 94 個体、軒平瓦は 127 個体出土しており、それぞれ帰属が不明かもしくは型式設定が不可能な破片資料を含む。軒丸瓦は全て丸瓦部内外面に縦方向の調整がみられ、成形台一本作りと考えられる。瓦当裏面から丸瓦部にかけてはえぐり取られたような調整が施されるため、成形台や布の痕跡は残されない。軒丸瓦で最も出土点数の多い I A 1 は最も小型で、他に比して瓦当が分厚く、丸瓦部から瓦当面にかけて大きく外反するのが特徴的である。丸瓦部は瓦当裏面の低位に位置し、丸瓦部の横断面形態は半裁円筒形とはならず、「C」字形ないしは「U」字形をなす。したがって通常復元される横置型成形台は想定しがたい。

軒丸瓦 I C 1 は唯一の四重圈の例で、外縁に範の痕跡を持たず、文様がややいびつである。瓦当部は

瓦当面から一定の厚さで割れており、瓦当部の成形技法が他と大きく異なっていた可能性が考えられる。

軒丸瓦ⅠA 5・ⅠA 6・ⅠA 9は資料が少ないことに加え、完形資料が無いため、形式内容に不明な点がある。

軒平瓦では、ⅠA 4とⅠA 5の区別が難しい。

各地点における遺構別の出土点数は別表（Tab. 6）のとおりである。周辺の遺跡における共有型式には、伊勢国分寺跡（僧寺）の軒丸瓦ⅠA 2、国分遺跡の軒平瓦ⅠA 2、八野遺跡の軒丸瓦ⅠA 2、八野瓦窯跡の軒丸瓦ⅠA 1がある。同じく難波宮系軒

瓦である鈴鹿郡関町切山瓦窯跡のものや同町古厩出土と伝えられる資料は今のところ国府跡をはじめ他の遺跡に分布が認められない。軒丸瓦ⅠA 5・ⅠA 9は天花寺廃寺・中谷遺跡・大角遺跡のものに法量が近く、比較検討が必要である。

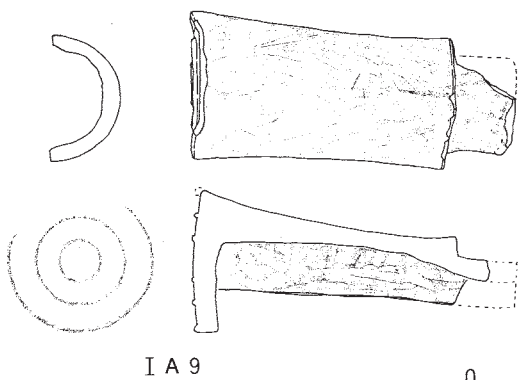
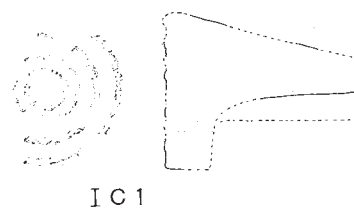
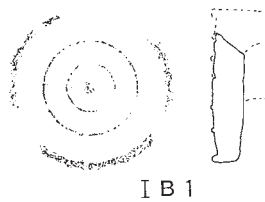
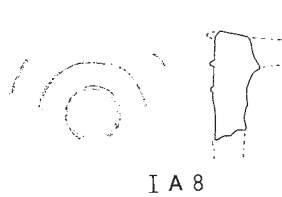
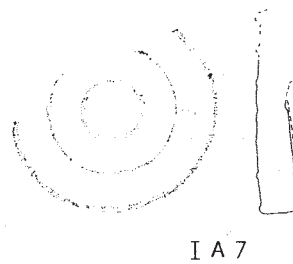
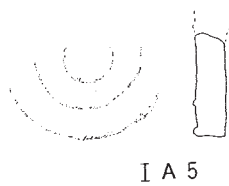
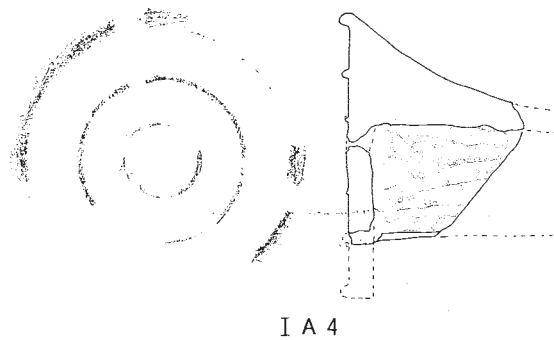
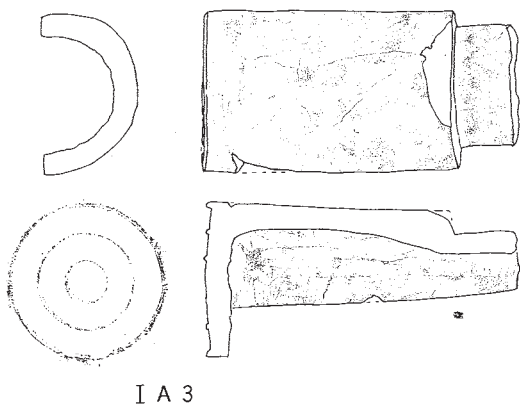
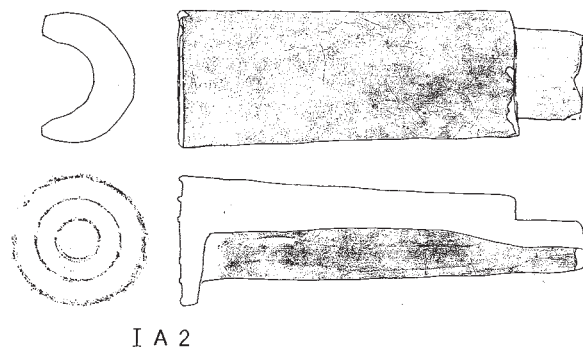
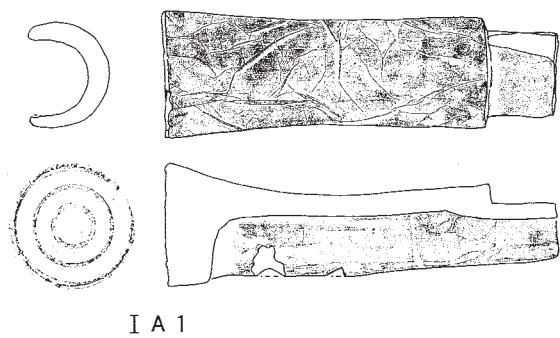
註1 伊勢国分寺跡出土の軒瓦については新田1998における型式設定を踏襲したい。

〔参考文献〕

新田剛1998「伊勢国分寺の軒瓦」『八賀晋先生退官記念文集 かにかくに』八賀晋先生のご退官を記念する会

Tab.3 土器一覧

No.	器種	次数	出土遺構	法量mm			調整・技法の特徴	胎土	色 調	焼 成	残存度	備 考
				口径	底径	器高						
1	土師器甕	10次	SD58 中層	130	50	89	体部外面ハケ・ケズリ，内面ケズリ	砂礫多い	赤褐色・暗褐色	並	口縁1/3	
2	須恵器杯	8次	SD23	(132)	—	30	底部ケズリ	精良	橙褐色	硬	口縁1/4	
3	須恵器杯	10次	SD42 上層	(138)	—	30	底部ケズリ	砂粒多い	橙褐色・灰褐色	硬	口縁1/4	
4	須恵器杯	8次	SD23	(154)	—	35	底部ケズリ	精良，細礫含む	灰色	硬	口縁一部	
5	須恵器杯	8次	SD23	(112)	(84)	50	底部糸切り未調整	精良	淡黄褐色	並	口縁一部	底部外面にヘラ描き
6	須恵器杯	8次	SD23 上層	(161)	125	54	底部ケズリ	精良，細礫含む	灰色	軟	口縁1/4	
7	須恵器杯	10次	SK57 上層	(170)	135	55	底部ケズリ，糸切り痕残存	砂粒多い	赤褐色	硬	一部欠損	底部外面にヘラ描き
8	須恵器杯	10次	SD58	(170)	(128)	48	底部ケズリ，糸切り痕残存	精良	灰褐色・淡橙褐色	硬	一部残	
9	須恵器蓋	8次	SD23 上層	(176)	136	69	底部ケズリ，糸切り痕残存	細礫含む	灰褐色	硬	口縁1/3	
10	須恵器蓋	8次	SD23 上層	(145)	—		天井部ケズリ	砂粒多い	灰色・橙褐色	並	口縁1/4	
11	須恵器蓋	8次	SD23 上層	(146)	—		天井部ケズリ	精良	灰色	硬	口縁一部	
12	須恵器蓋	8次	SD23	(150)	—			精良	灰色・橙褐色	硬	口縁一部	
13	須恵器蓋	8次	表土	(154)	—		天井部ケズリ	並	灰色	硬	口縁一部	
14	須恵器蓋	8次	SD23 上層	(194)	—		天井部ケズリ	砂粒多い	淡黄褐色	硬	口縁一部	
15	須恵器蓋	8次	SD23 上層	(196)	—		天井部ケズリ	精良	灰色	硬	口縁一部	
16	須恵器蓋	8次	SD23 上層		—			並	暗灰色	硬	つまみのみ	
17	須恵器蓋	8次	SD23 上層		—		天井部ケズリ	砂粒多い，黒色粒子含む	灰色	硬	天井部のみ	



0 30cm

鈴鹿郡関町

Fig.5 軒丸瓦の型式 (1 : 8)

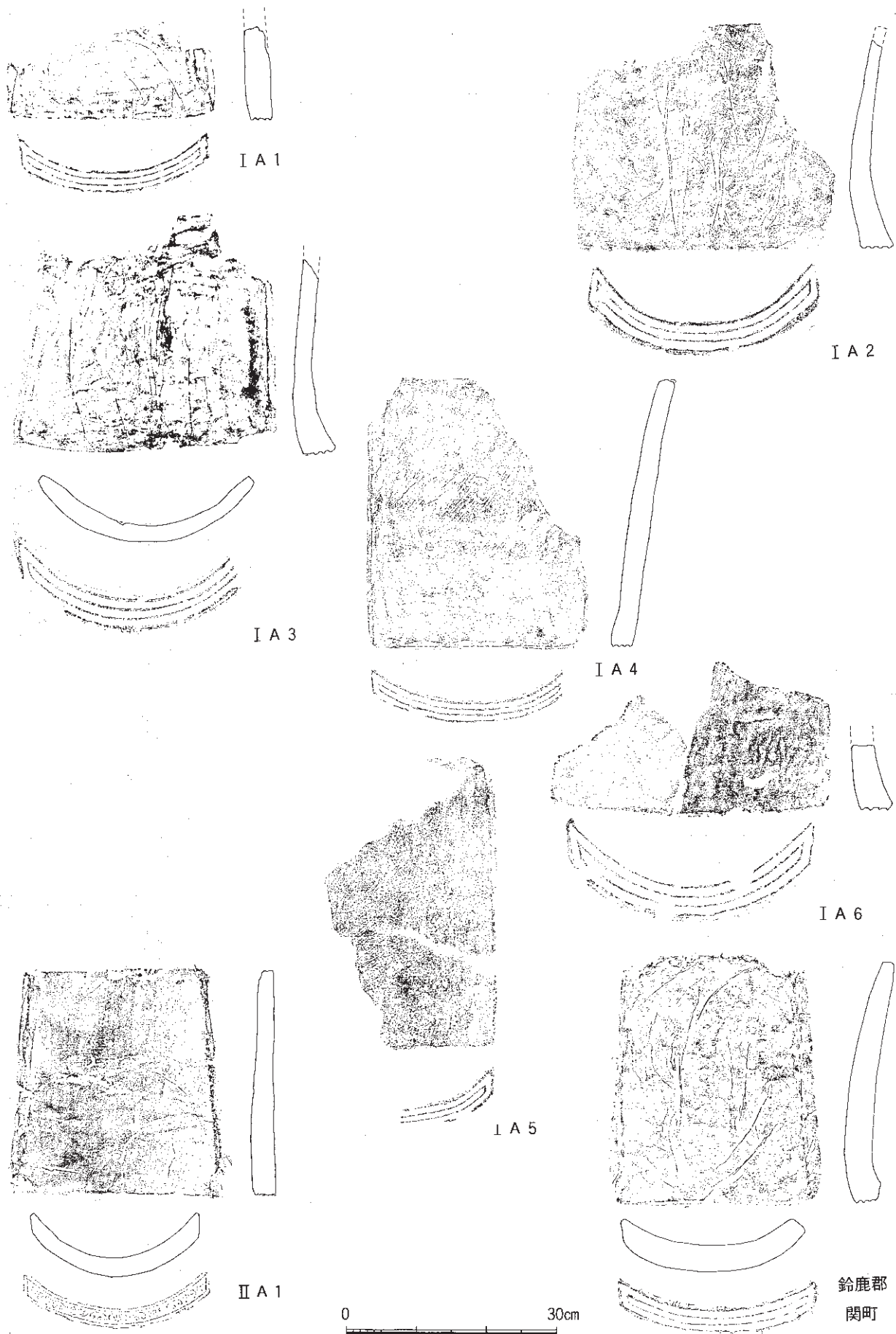


Fig. 6 軒平瓦の型式 (1:8)

Tab.4 軒丸瓦型式一覧

型式名	法 量 mm						地点別個体数			特徴など
	瓦当径	瓦当厚	第1圏径	第2圏径	第3圏径	第4圏径	矢下	長塚	南野	
I A 1	129	50	114	77	37	—	32	7	—	三重圏。瓦当径では最小。瓦当厚は他より厚い。胴部は外反する。色調は淡褐色を呈するものが多い。最も出土点数が多い。八野瓦窯跡にも出土例がある。
I A 2	140	31	127	82	39	—	6	—	—	三重圏。胴部は肉厚。淡黄灰色を呈するものが多く、軟質。矢下地区のみに認められる。伊勢国分寺跡・八野遺跡にも出土例があるが、僧寺のものは国府跡と比べ胴部が短い。
I A 3	167	26	152	98	40	—	11	1	—	三重圏。灰色を呈する。須恵質で硬質のものがみられる。
I A 4	(296)	23	不明	不明	69	—	1	—	—	三重圏。瓦当径では最大。胴部は反る。淡黄灰色を呈し、軟質。素材粘土の調整痕が残る。矢下地区出土の1点のみ。
I A 5	180	31	不明	(104)	(46)	—	—	2	—	三重圏。暗灰色を呈し、軟質。長塚地区のみに認められる。胴部は外反するものと思われる。
I A 6	(147)	37	不明	(78)	31	—	—	1	—	三重圏。淡褐色を呈する。圏線が太い。瓦当径や圏線のバランスはI A 2に似る。長塚地区出土の1点のみ。
I A 7	(218)	不明	不明	(127)	56	—	—	—	1	三重圏。淡灰色を呈し、軟質。南野地区出土の1点のみ。瓦当径はI A 4に次いで大きい。
I A 8	153	33	142	88	40	—	2	—	—	三重圏。淡灰色を呈し、須恵質。胴部は外反する。I A 3に似るが、瓦当径が小さい。矢下地区のみに認められる。
I A 9	(182)	35	不明	不明	52	—	—	1	—	三重圏。淡灰色を呈し、須恵質。長塚地区出土の1点のみ。瓦当径はI A 5に近いが、第3圏は大きい。長塚地区出土の1点のみ。
I B 1	(167)	26	不明	不明	42	—	3	1	—	三重圏で、中央に珠点を有する。軟質のものと硬質のものがある。中央珠点は極めて低いか、殆ど残存しない。外縁は丸みを帯びる。
I C 1	(164)	44	不明	不明	57	28	—	2	—	四重圏。橙褐色を呈する。圏線は扁平で、太い。

Tab.5 軒平瓦型式一覧

型式名	法 量 mm						地点別個体数			特徴など
	瓦当横幅	瓦当縦幅	第1廓縦幅	第2廓縦幅	右脇幅	左脇幅	矢下	長塚	南野	
I A 1	267	32	20	4	4	4	13	5	—	二重廓。直線頸。色調は軒丸瓦I A 1に似て、橙褐色を呈するものが多い。概して彫りが深く、圏線の断面は三角形。凹面と瓦当面の角度が大きい。
I A 2	353	46	29	6	6	6	38	9	—	二重廓。曲線頸。灰色・暗灰色を呈し、須恵質のものが多い。脇外縁が削られている例がある。最も出土点数が多い。国分遺跡(推定尼寺)にも出土例がある。
I A 3	331	47	28	4	3	3	3	8	—	二重廓。曲線頸だが、角度が緩い。淡黄灰色で、軟質。紋様は丸みを帯びる。
I A 4	275	32	19	4	4	6	13	2	—	二重廓。直線頸と曲線頸のものがある。最も小型。淡灰色を呈し、須恵質。紋様の断面は矩形を呈する。
I A 5	282	32	19	4	4	4	5	—	—	二重廓。直線頸。淡黄灰色を呈し、軟質のものが多い。I A 4と酷似する。I A 4より脇幅が狭い。中央は直線的で、両端がやや屈曲する。矢下地区のみに認められる。
I A 6	348	48	31	6	7	5	—	12	—	二重廓。曲線頸。淡黄灰色を呈し、軟質のものが多い。最も厚い。第2廓は第1廓より鋭角で、相似形とならない。長塚地区のみに認められる。
II A 1	270	52	24	16	2	2	6	—	—	外縁素紋唐草紋。平城宮 6719A と同范。直線頸。おおむね灰褐色を呈する。矢下地区のみに認められる。

径は直径。界線は外側から中心に向けて数え、内法を計測。○は推定値

Tab.6 地点及び遺構別軒瓦出土点数

軒丸瓦		I A 1	I A 2	I A 3	I A 4	I A 5	I A 6	I A 7	I A 8	I A 9	I B 1	I C 1	不明	合計
矢下政庁	正殿													
	後殿												1	1
	西脇殿			5							1		5	11
	北軒廊												2	2
	東内溝北													
	東内溝南	2		4	1								2	9
	西築地		1											1
	西内溝北	17	2											19
	西内溝南													
	南内溝	1	1						2				2	6
	西隅楼土坑	3	1								1		2	7
	西隅楼南溝	9		2									1	12
	表際その他		1								1			2
小計		32	6	11	1				2		3		15	70
長塚	大溝 S D 23	2				1				1			1	5
	溝 S D 41			1									2	3
	溝 S D 42												1	1
	土坑 S D 24	1												1
	土坑 S D 56													
	土坑 S D 57	1									1	1		3
	足場穴 S P 45													
	表際その他	3				1	1					1	2	8
小計		7		1		2	1			1	1	2	6	21
南野表際その他								1						
小計								1						
不明			2											2
総計		39	8	12	1	3	1	1	2	2	5	2	18	94

軒平瓦		I A 1	I A 2	I A 3	I A 4	I A 5	I A 6	Ⅱ A 1	不明	合計
矢下政庁	正殿	1								
	後殿	1	1							2
	西脇殿	1	1	2						4
	北軒廊	1	2		2	1				6
	西軒廊		2					1		3
	東築地内溝北		20							20
	東築地内溝南		1						1	2
	西築地				1					1
	西築地内溝北									
	西築地内溝南	2				2		1		5
	南内溝	1	1	1	7	1				11
	西隅楼土坑	1	3			1				5
	西隅楼南溝	5	3		3			3		14
	表際その他		4							4
小計		13	38	3	13	5		5	1	70
長塚	大溝 S D 23	1	2	1			3		1	8
	溝 S D 41		4				2			6
	土坑 S D 24	1	1	7			1			10
	土坑 S D 56						2			2
	土坑 S D 57	2			1		2		1	6
	足場穴 S P 45						1			1
	表際その他	1	2		1				1	5
小計		5	9	8	2		11		3	38
南野表際その他		○								○
小計		○								○
不明			4				2	1	4	11
総計		18	51	11	15	5	13	6	8	127

V. ま と め

1. 遺構相互の関係と倒壊瓦

2 力年に互る調査で検出された遺構は建物・溝・土坑・柱穴（足場穴）である。4 棟の建物跡は瓦葺礎石建物の基壇基礎である。これらの遺構には当遺跡においては稀な切り合い関係を有するものがある。

建物 S B 27 は溝 S D 21 と土坑 S K 24 に切られ、溝 S D 22・土坑 S K 25（短い溝の可能性もある）は土坑 S K 24 に切られる。溝 S D 55・溝 S D 58 は、切り合い関係は不明であるが、それぞれ土坑 S K 56・土坑 S K 57 に先行するようだ。S D 21 は S B 27 をわずかに切るとは云え、建物西辺の延長線上に位置するため、同時存在した可能性が高い。4 棟の建物跡は、後述のとおりその規格的・計画的な配置から見て同時期の建物群と考えられる。倒壊瓦が検出された大溝 S D 23 や S D 26・S D 36・S D 41～43 は建物跡と方向を揃えており、同時期のものであろう。したがって土坑 S K 24・S K 56・S K 57 が後発のものであることを除けば、その他の建物や溝等は全て同一時期のものと判断される。おそらくはこれらの建物群が廃絶して以降、廃棄物の処理のために S K 24・56・57 が設けられたのであろう。

大溝 S D 23 から検出された倒壊建物の瓦列は、溝と平行する建物に葺かれていたことは疑いない。瓦の重なり具合から倒壊瓦のほとんどは屋根の東斜面にあたることも確実である。方向の異なる平瓦、すなわち広端部を東に向けて出土した 4 点（P L 14 ▲印）は東面する屋根の軒先に使用されたものか、あるいは西斜面のものが部分的に残存したものか判断し難いが、他が東斜面のものであることからみれば、前者の解釈が妥当と考えられる。とすれば S D 23 から出土した軒瓦とくに軒平瓦については他の建物に由来するものと考えるのが自然である。

平瓦の列は 23 列に互って残存し、1 列あたり最多で 12 枚遺存していた。丸瓦は平瓦の上を滑落したためか残りは悪く、凹面を表に向けているものも多い。

本来使用されていた瓦の枚数については今後の課題としたいが、本瓦葺きであったことは出土状況から見て確実で、軒先から大棟までのうちごく一部分が

残存したものと云える。

さてそれではこれら S D 23 の倒壊瓦はどの建物に由来するものであろうか。倒壊瓦のみから想像すれば溝の西側に由来する建物を考えたいところである。ところが溝の西側には S D 36 があるのみで、建物の痕跡は認められなかった。反対に東側には南北棟と見られる S B 27 がある。仮にこの S B 27 が西側に倒壊し、S D 23 に瓦列を留めたとすれば、大溝に近い西面ではなく、13m 前後離れた東面の瓦が残存したと考えなければならない。

S B 27 は後述の通り 2 間×10 間の南北棟の建物が想定され、梁行は 1 間=10 尺と考えられるので、基壇を除いた建物の高さは 6m 以上となろう。基礎地形の痕跡しか見つかっていない S B 27 における倒壊プロセスを復元するのは容易ではないが、屋根の西面については倒壊時の衝撃のため散乱・大破し、東面については衝撃が吸収され、屋根の部材とともにややひねりを加えられて着地した一部が偶然にも屋根の原形を留めたものと考えざるを得ない。しかも相当の距離を移動していることから、尋常な倒壊状況ではなかったことが想像される。

なお倒壊瓦の下には S D 23 が掘削されたのちに自然堆積した層が認められ、溝の底面から完形及び準完形軒瓦が出土した S D 41 とは堆積プロセスが異なることにも注意したい。おそらくは溝が掘削されてから後にその形状が維持されたか、または自然に埋没するにまかせたかの違いによるものと解釈できる。

さらに想像を逞しくすれば S D 23 は、土地区画のためというよりも基壇築成の資材調達にその主たる目的が置かれていたため、建設後はその役割を終えていたものと理解される。したがって掘削後その形状を維持する必要はなく、そのまま放置され、近年の大規模な耕作がなされるまでは溝の痕跡を地表に留めていたと考えられる。

2. 建物の配置

検出された建物はいずれも基壇基礎のみで、礎石はおろかその抜き取り痕跡なども一切検出されなかった。これらの遺構から建物の配置や形態を知る

には、基礎地形と建築用の足場穴と見られる小柱穴のみが手がかりとなる。もちろん基礎地形の形状がそのまま基壇の形状に一致する保証はないが、以下の議論では基礎地形の平面形状における外周線が基壇の平面形に近いものと仮定しておきたい。

4 棟の建物の基礎地形のうち S B 44・S B 47 は東西棟、S B 27 は南北棟であるのは間違いないであろう。S B 40 は一部のみの検出なので不確実ではあるものの S B 44・S B 47 と南北に並列する東西棟の建物であると考えられる。

これら 4 棟の基礎地形の規模や位置関係には極めて高い規格性がうかがえる。いずれも建物の方向は $N1^{\circ}W$ に揃えられている。S B 44・S B 47 の南北規模はともに 15m で、S B 47 基礎地形南辺と S B 44 北辺の間隔は 12m である。S B 40 は S B 44・S B 47 と比べ東西規模がやや小さく、これら 3 棟が南北中軸線を共有して線対称に建てられているとすれば、その差は約 2.4m である。S B 44 南辺と S B 40 北辺の距離もやや狭く、11.4m である。S B 44 及び S B 47 西辺と S B 27 東辺の間隔は 2.4m である。以上の配置関係に足場穴の位置を加味すると、建物の柱の位置が推定できる。すなわち S B 27・S B 44・S B 47 周辺で確認された小柱穴の大部分は建物の柱間の延長線上に配された足場穴とすることができるのである。さらに柱筋の延長線上に位置すると考えられる足場穴 SP49・51・52・59 などの位置関係も加えて考察するならば、Fig.7 のような復原案が考えられる。

S B 27 は梁行 10 尺・桁行 10 尺等間の 2 間×10 間、S B 44・47 は梁行 10 尺・桁行 12 尺等間の 4 間×7 間の四面庇付建物と考えられ、よって S B 27・44・47 の柱筋は一致する。S B 44・47 の東には S B 27 と同様の建物を想定し、S B 40 は S B 44・47 と比べ桁行の柱間を 1 尺ずつ減じたものとした。S B 44・47 の桁行が 7 間であると想定したのは、こうすることにより中軸線が現在想定される方格地割ブロックの中軸にほぼ一致するからである。S B 27 の桁行については明確な推定根拠はないが、関連する足場穴列の南端から仮に 10 間とした。S B 40 の梁行を 2 間としたのは、周囲をめぐり西へ屈曲する溝が、梁行の柱間を 9 尺と考えた場合の東西中軸線に矛盾無く対応

することによる。

推定部分の多い S B 40 や S B 27 の南北規模、S B 27 と対になる東脇殿様の建物は除くとしても、これらの建物群が空地の少ない密接した配置を採ることは確かである。

調査区西端で検出された溝 S D 26・36 は三重県埋蔵文化財センターにより提起された 120m を単位とした方格地割（宇河 1996）に伴う溝に近い。方格地割には区画側溝と区画内溝があると云われるが、S D 26・36 がそれぞれ対応するものであろうか。S D 26 と S D 36 の芯々間距離は 8～9m ほどであるが、これを $8.4m = 28$ 尺とすると区画内溝で囲まれた範囲は 1 辺 $103.2m = 344$ 尺となり、さらにその 2 分の 1 が推定される建物群の東西距離に等しくなる。建物群の西側に位置する大溝 S D 23 も含めた範囲の東西規模は $103.2m$ の 4 分の 3 に収まる。

3. 出土遺物と遺構との関係

伊勢国府跡出土の土器は今回報告のものも含め、非常に少ない。その大部分は奈良・平安時代のものである。その他縄文土器や国府廃絶後の開墾等に伴うものと見られる中世以降の陶器類がごく少量報告されてきた。第 8・10 次調査において出土した土師器・須恵器は整理箱 4 箱分で、そのうち図化できたものは土師器 1 点・須恵器 16 点である。形態的な特徴から長期に亙るものが混在しているとは思われず、比較的短期間の所産と判断される。

通常こうした土器類が示す年代は、それぞれが出土した遺構あるいは地層の埋没時期に一致するか、もしくは極めて近いものとされる。したがって遺構の埋没時期と掘削時期に時間差が想定される場合、埋土に含まれる遺物から導かれる遺構の年代はあくまでもその遺構が埋没し始めた以降の年代であって、掘削年代ではない。仮にある遺構の底から年代を示す遺物が出土した場合、その遺物の年代が遺構の掘削年代に近接することは大いにありうるが、その遺構が掘削されたのち自然埋没を避けるような維持管理等がなされたならば、遺構の掘削から遺物の遺棄までの間には相当な時間的隔たりを想定しなければならないことがある。こうした時間差は一般住居や小規模な土坑の場合さほど問題にはならないが、徹底的な管理が行われた可能性が高い官衙遺跡の場合、

遺構の掘削年代と埋没年代は厳密に区別される必要がある。以上は、出土土器と遺構の関係について考察するときの大前提であることは云うまでもないだろう。

第8・10次調査区の中で最も多く土器が出土した大溝S D 23では埋土中程から倒壊建物の瓦が葺きあしを留めた状態で検出された。土器類はこれら倒壊瓦の直上や混入する形で検出されていることから、S D 23出土の土器類は建物倒壊以後の年代を示している。

一方S D 41はS D 23と比べ堆積のプロセスが異なるようだ。S D 23では倒壊瓦が堆積するまで再掘削などが行われることもなく自然堆積した様子が土層断面から読みとれるのに対し、S D 41では底面から完形・準完形軒瓦が検出されており、一定期間溝の形状が保たれた形跡がある。完形・順完形軒瓦の投棄ないしは崩落を契機に溝の埋没が始まったものと解釈できる。

その他にS K 57をはじめS K 24・S K 56など建物遺構に隣接して検出された各土坑からも土器が出土している。これらの土坑における埋土には途中はつきりとした時間的断絶がうかがえる不整合面が見られない。溝等との切り合い関係は詳細につかめないが、溝等が埋没を開始する前にこれらの溝を切るように設けられたものと考えられる。施設の廃絶時以降に設けられた廃物処理用と推定されるこれらの土坑から出土した土器は当然施設廃絶以後の年代を示す。

4. 出土遺物から見る遺構の年代

伊勢国府跡出土土器についての考察は報告書記載のものを除けば非常に少なく、水橋公恵氏による論考が唯一と云って良い（水橋1997）。水橋論文では実見に基づいて土器の年代的な位置づけが与えられており、これまでなおざりにされてきた当遺跡における土器研究の規範となるものと高く評価できる。

当報告の土器の検討についても水橋論文並びに日頃の同氏からのアドバイスが大いに参考となっている。

鈴鹿市教育委員会によって以前に報告された土器類の評価については事実誤認もあり（註1）、当報告以降随時訂正を加えるものとした。ただし後述するように土器の年代と遺構の年代との関係について

は水橋論文とは異なる解釈が可能である。

土器の年代的な位置を考える際、参考となるのは当該地域における既存の編年研究である。伊勢湾西岸地域では斎宮跡の土師器研究が唯一公にされているが（斎宮跡調査事務所1985）、猿投窯や都城の土器編年が参照されることが多い。今回出土した土器のうち図示できたのは他と比較のしやすい須恵器坏や蓋類が大半を占める。今回出土したものも含め、伊勢国府跡の須恵・器には橙褐色を呈するものが目につく。底部と体部の境目に高台を有する形態は、猿投窯との比較が難しい。都城における編年では平城V・平安1期に近いと思われる。口縁部が屈曲するものとそうでないものが認められる蓋類は、猿投窯で云えばNN32号窯式からIG78号窯式までの間で理解すべきであろう。総体的に見て、実年代に云い換えるならば8世紀後葉から9世紀前葉までものが含まれていると云える。したがってこれらの遺物が示す年代のうち、最新のものが遺構の埋没年代に近い。その遺構がS K 57などの廃棄土坑であればその年代は周囲の建物の廃絶年代を遡ることはなく、S D 23であれば建物の倒壊以後の年代ということである。結論としては9世紀初頭頃に施設の機能が一変するような画期があったものと理解しておきたい。

それでは水橋論文で扱われた政庁出土の土器（Fig.8）についてはどうであろうか。須恵器蓋について水橋氏は、その平均口径から平安Ⅱ期古～中にあてており、土師器については奈良時代後半から平安前期の範囲内にあるとしている。当時の報告で053併行とした碗を除けば、何とか今回の資料の年代幅のうちに収まるようである。問題はこれらの遺物の示す年代が政庁の盛衰のどの時点を表すかである。水橋氏は自身の論文の結語において「9世紀代に初めて国衙が成立する国がある可能性」を指摘していることから見て、政庁の築地内溝等から出土した土器の年代を矢下政庁の建立時期にあてていることは疑いない。果たして建：立直後の政庁域内において土器などの廃品が投棄されるであろうか。西隅楼（註2）上の土坑S K 04に見られるようにスラグや輪羽口を含む大穴が築地のすぐ内側に掘られるであろうか。これらは政庁が本来の機能を失って以後堆積したものとするのが妥当なのである。しかもこ

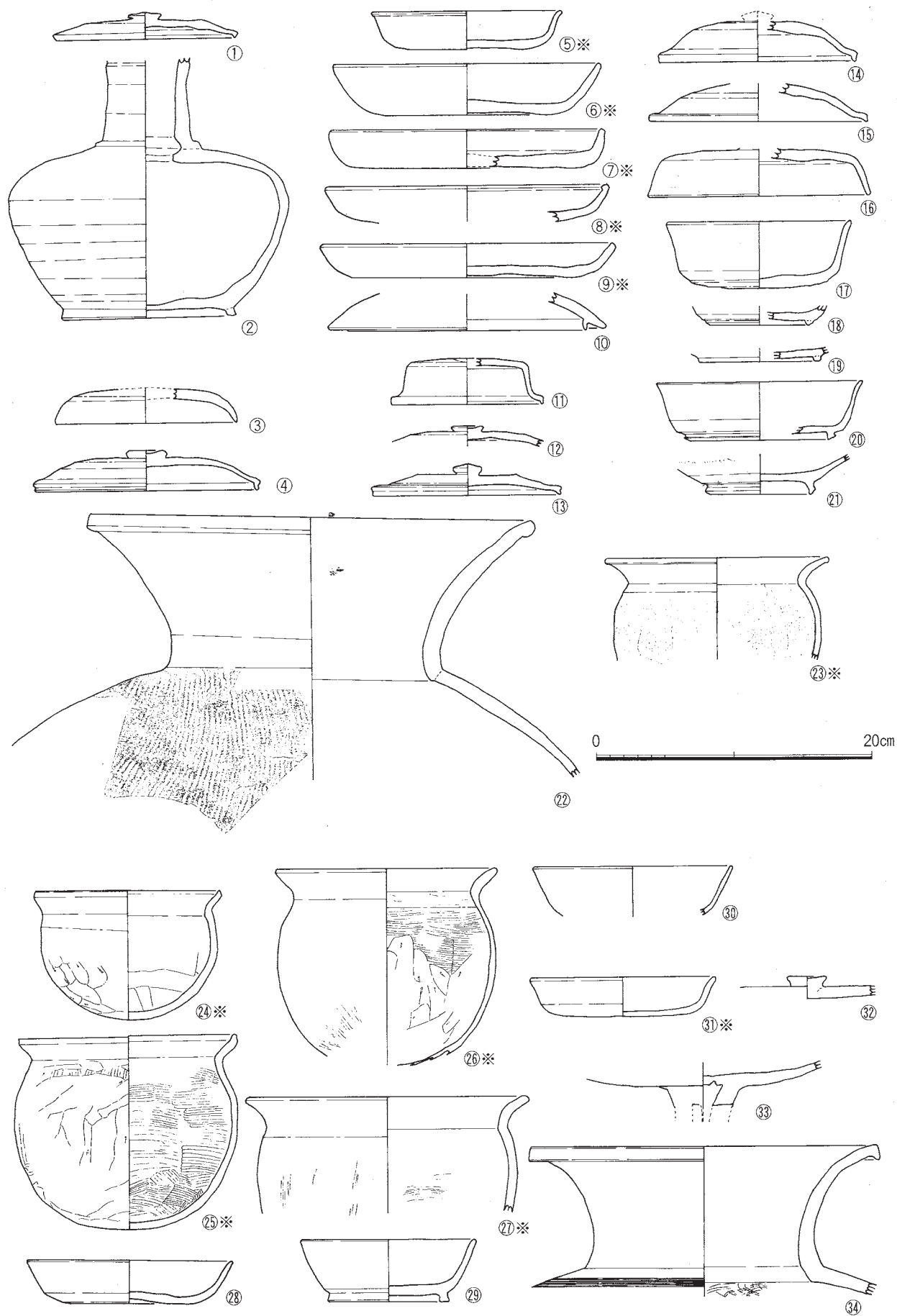


Fig.8 伊勢国府跡出土の土器 (1:4) ※は土師器

これらの遺構の中には中・近世あるいは現代に至ってもなお完全に埋まりきらないものがある。S D 05 における 053 段階の土器や 7 次調査の S D 19 における土師器小皿、あるいは今回の S D 23 における近世陶器などは長者屋敷遺跡において国府が廃れたのちの人々の活動を示すものにすぎない。遺構の埋没年代と成立年代が大きく隔たる遺跡において遺構出土の遺物が遺構の掘削年代を示すことが極めて稀なことを肝に銘じたい。

5. 出土瓦の検討

伊勢国府跡出土の軒瓦は軒丸瓦 11 型式・軒平瓦 7 型式となった (Tab.6・Fig.4・5)。軒瓦が出土する 3 地点のうち軒丸瓦は矢下地区 (政庁) で 6 種類、長塚地区で 7 種類、南野地区で 1 種類、軒平瓦は矢下地区で 6 種類、長塚地区で 5 種類ある。出土点数ではやはり政庁が一番多く、南野地区では数点と極端に少ない。南野地区ではごく限定的に軒瓦が使用されたか、他所へ持ち出された可能性があるが、瓦溜まりからの出土が無いことや軒瓦として使用された平瓦の存在から前者の蓋然性が高い。一方長塚地区では軒瓦が一定量認められるが、S B 27 については倒壊瓦群のなかに軒に使用された平瓦が想定できるため、軒瓦を使用しないか、あるいは使用点数が少ない屋根の可能性が指摘できる。

政庁と長塚地区とで共有する軒瓦型式は、相互の建物の共時性あるいは前後関係を探る材料となりうるが箔の損耗状況などについては今のところ詳細な検討を加えるには至っていない。政庁にのみ認められる軒平瓦Ⅱ A 1 は平城宮 6719A と同範 (山崎 1994) で、技法・胎土の違いから範のみが移動し、かつ箔の損耗から伊勢国府のものが後出であると解釈されている (註 3)。この瓦の「製作時期及び範型移動の時期は・恭仁宮遷都以前の天平年間 (729 ~ 740) に置」 (山崎 1994) かれるので、矢下地区における政庁の成立時期もそれに近い年代すなわち 8 世紀中頃という年代が与えられるであろう。

一方長塚地区の倒壊瓦を見る限り、時期の異なる瓦が混在しているような状況は読みとれず、ある一時期に供給された瓦のみで構成されているという印象が強い。つまり S B 27 については、存続時期はともかく、建設されたのち大規模な屋根の補修を受け

ることのないまま倒壊に至ったものと推定され、その廃絶時期は出土土器の示す年代を下ることはない。

長塚地区における建物群と政庁との時間的な関係は両者の瓦の比較検討を待って考察したいが、軒瓦の共有関係から見て少なくとも両者が大きく隔たることではないであろう。

さて政庁においても未だ出土例のない鬼瓦の良好な破片資料が得られたことは建物の構造や格式を知る上で大きな成果であった。南野地区で出土した 1 点を合わせて伊勢国府跡では合計 7 点を数えることとなった。全て同範と見られる鬼面文鬼瓦である。下歯・下牙の表現は欠くらしいが、大きく立体的な鼻をはじめ全体に彫りが深く、宮廷様式の整ったデザインを有する。伊勢国分寺跡にもやや凹凸に乏しいよく似た例があり、国府・国分寺における造瓦の実態を考える上で興味深い (註 4)。

6. 政庁・南野地区における建物群との比較

政庁・南野地区・長塚地区はともに瓦葺礎石建物を有する官衙である。

長塚地区の建物群を政庁と比較したときまず異なるのは建物に隣接して溝が設けられていることであり、南野地区においても同様なことが云えた (新田 1997)。このことは政庁が築地堀に囲繞されていることと関係するのかもしれない。南野地区の建物群は主屋と見られる S B 08 と副屋様の建物である S B 01 が比較的近接した配置を見せ、長塚地区においては主屋級の S B 44・47 と副屋 S B 27 とがさらに近接する。建物の方向は南野地区の S B 08・09 がほぼ座標北を示す以外は全て N 1° W である。

3 地区における共通点として特に目を惹くのはともに鉄滓が出土していることであろう。政庁では西隅楼上の土坑から土器・瓦・鞘羽口片とともに出土しており、当地点における政庁廃絶以後の利用形態を示唆するものであると理解された。同様に建物に近接する溝内から鉄滓の出土があった南野・長塚両地区においても施設の廃絶以降の所産と推定される。

7. 国府域と官衙ブロックの実態

これまでの調査によって遺跡南端における 8 世紀中頃の政庁や、遺跡中央を東西に横切る農道に沿うかのごとく配置された瓦葺礎石建物から成る官衙の存在が明らかになった。こうした各建物群の配置パ

ターンが東西中軸型（金田 1995）に類することはかつて指摘されたとおりである（新田 1997）。

さらにこれらを包括する東西 5 区画・南北 6 区画に及ぶ方格地割の存在が提起され、かつて克服された「方八町」論とは異なる意味での都市的国府像が示されている。この方格地割の施工時期については平安京跡の条坊や斎宮跡の方格地割との比較から平安初頭頃が想定された（宇河 1997）。この年代はすでに検討した長塚地区における建物の廃絶時期に近い。今回の建物群のように 1 ブロックにうまく収まる可能性があれば、何らかの地割計画があったことは検討されなければならない。

ただしこのような計画的な各施設の配置関係を 12m 道路を伴う整然とした都市的・条坊的景観に結びつけるにはなお慎重にならざるを得ない。かつて周防・近江・下野等の事例をもって検討されたように国府における均等地割は、部分的・短期的で、国府創設当初から市街区画として存在したわけではない（山中 1994）。そうした観点から再度伊勢国府跡の方格地割案を検討してみると解決しなければならない問題点があるのに気付く。

まず第一に 12m 道路を伴う地割が設けられたとしても国府の中心である政庁との関連が不明である。地割復原案では政庁域が包摂されているが、120m を単位とした地割に取り込まれるでもなく、また中軸に置かれるでもなく、極めて無理がある。さらに地割の施工が政庁廃絶後であると云うのであれば、なおさら国府との関連は求めにくい。換言すれば国府域を構成する方格地割を想定するにはその区画に整合的な政庁の確認が不可欠である。さらに加えて朱雀路的な政庁の中軸線に一致する道路の存在も指摘されているが（宇河 1996・辻 1996）、方格地割敷設範囲の中軸となるわけではない。

第二には伊勢国府で確認されている建物と方格地割の方位が一致しないことである。地割が国府に関連するのであれば同じ方位をもつ国府関連建物があって良い。

三番目としては方格地割の敷設範囲が不審なことである。矢下政庁の東で南から 2 番目の区画に大きな谷が入り込んでいる。南西の 4 ブロックについても同様である。従って一番東の 1 区画と南の 2 区画

を含む方格プランは成立しにくい。実際政庁周辺における試掘調査でこの方格地割案に合致する溝は検出されていない。さらに南野地区で検出された基礎地形 S B 08 は想定される道路に近接しすぎており、不自然である。

以上を矛盾なく説明しようとすれば既存の方格地割説とは異なった説明が必要となる。現段階で想定できるのはまず政庁を中心とした造営計画があり、次いで東西中軸線つまり今回の調査地点の南に位置する農道を基準とした区画が設定され、長塚・南野両地区における建物群のような各種官衙が建設されたらしいことである。実際この農道沿いには瓦の分布からすれば（村山 1992）、他にも建物群が存在することはほぼ確実である。政庁とその北方の建物群の造営計画に共通性があるのか、あるいは別個のプランによったのかはさらに資料の蓄積を待たねばならない。さらに今回の調査地区の約 100m 北方にもかつて土壇が存在したこと（鈴木 1933）、官衙群が散在し、個々に区画施設を伴った「院」を形成するような状況もうかがい知れる。

その一方敷設範囲はともかく方形の土地区画がかつて国府跡周辺に広く認められ、現在でも一部その名残を留めるのも事実である。これらが先述のとおり国府に無関係であるとすれば、これらの方形区画は廃墟と化した国府関連施設を基準に実施された再開発によるものであり、一種の条里地割に近いものである可能性を考えたい。それでもなお以上の議論を覆して、方格地割による整然とした国府域が構成されていたとするならば、他国に例を見ない特異な国府像がイメージされることとなり、今のところ伊勢国府のみで検証可能な課題として大いに注目されるところではある。

8. 今後の課題

これまでの調査の中で特に際だつ成果は、瓦葺礎石建物からなる周辺官衙群である。これらの性格については政庁に比肩する規模と構造から国司館とする議論もあったが（新田 1997）、筑後・下野・陸奥等他国の例を見る限り礎石建ちの館は想定しづらいのが現状だ。同じ大國近江においては伊勢同様政庁以外に瓦葺礎石建物の国府関連遺構があるので、双方の事例を整理し、それぞれの建物群の類型化を図

る必要がある。都城における貴族の邸宅では瓦葺きの主屋を持つものが知られるが、これらとて総瓦葺きなのかあるいは堤瓦を伴う檜皮葺きの屋根なのかというような問題が常につきまとう（上原 1988）。

今回のS B 27 に関しては総瓦葺きであることがわかったが、既存の調査例や今後新規に検出される事例について詳細に検討を加える必要があろう。

その一方他国の例で知られるような掘立柱建物群が未検出なのも目を惹く。これまでの調査が、瓦を中心とした遺物の集中散布域に限られてきたことを差し引いても、掘立柱建物の検出が1棟のみであることや足場穴以外の柱穴自体見つかっていないことは異例と云える。しばらくは今後の調査例を見守りたい。上屋構造とは別に建物の平面構造や一定区画内における建物の位置関係及び建蔽率などは、他国の事例はもちろんのこと檜城の一町邸宅（山岸 1988）なども参考となろうか。

方格地割も含めた国府域の問題は今後も避けて通れない課題であると云える。国府に伴う方格地割についての見解は先に述べたとおり否定的にならざるを得なかったが、もし国府関連の方格地割が存在するとすれば、国府域とその周辺とが明確に分けられた都城の縮小版に近い都市的景観が想定されることとなり、国府研究の上で重大な問題を孕んでいる。今後の調査においてもさらに検証を深めたい。

最近の開発に伴う緊急調査では政庁の東西でも何らかの遺構が確認されている（新田 1998）。また政庁域の北限を画するという溝は現在想定される政庁域を東西に突き抜ける可能性があること（新田 1996）からも、政庁外郭施設の存在も視野に入れなければならない。未だ明らかとなっていない政庁域南限すなわち南築地及び南門の確認については早期解決が求められている。

註 1. 過去の報告書中に示された遺物の年代的感については明らかに誤謬があり、今後十分に検討を加えたい。また、暗文が認められるものがないとした水橋氏の分析所見は誤りであり訂正されたい。破片資料のため図示されたことはないが、政庁出土の資料中に明らかに含まれる。

註 2. 政庁の北東及び北西に位置する方形の壇状部を隅楼と仮称しているが、建物跡は確認されていない。

註 3. 山崎 1994。平城宮例と当遺跡における発掘調査例と

の比較結果については小澤毅氏から直接御教示いただいた。

註 4. 鬼瓦の観察・比較については前田清彦氏から御教示を得た。

〔参考文献〕

- 鈴木敏雄 1933『三重縣古瓦図録』
奈良国立文化財研究所 1976『平城宮跡発掘調査調査報告Ⅶ』
齋宮跡調査事務所 1985「齋宮跡の土師器」『三重県齋宮跡調査事務所年報 1984』
上原真人 1988「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった - 平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって - 」『高井悌三郎先生喜寿記念論集歴史学と考古学』
山岸常人 1988「宅地と住宅」『季刊考古学』第 22 号雄山閣
村山邦彦 1992「鈴鹿市長者屋敷遺跡の研究」『古代学研究』第 128 号古代学協会
城ヶ谷和広 1993「尾張における 7 世紀から 9 世紀半ばの須恵器～猿投窯とその周辺～」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東 2 須恵器一』古代の土器研究会
齊藤孝正 1994「東海地方の施釉陶器生産 - 猿投窯を中心に - 」『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器 - 』古代の土器研究会
山崎信二 1994『平城宮・京と同籠の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察』
齊藤孝正他 1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告 1』
齊藤孝正 1987「猿投窯 IV 期における須恵器生産の様相 - 杯類・碗類・盤類の変遷に関する予察一」『名古屋大学文学部研究論集』XCVI 史学 33
山中敏史 1994「古代地方官衙遺跡の研究」塙書房
金田章裕 1995「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 63 集
宇河雅之 1996「長者屋敷遺跡」『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
辻公則 1996「国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅲ
新田剛 1996「伊勢国府跡（第 4 次）」『伊勢国分寺・国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
尾野善裕 1997「猿投窯と西三河の窯跡」『須恵器から灰釉陶器へ - 生産地と消費地から - 』
新田剛 1997「伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）（第 7 次）」『伊勢国分寺・国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
宇河雅之 1997「伊勢国府の方格地割 - その存在の可能性と意義 - 」『研究紀要』第 6 号三重県埋蔵文化財センター
水橋公恵 1997「伊勢・伊賀国衙成立時期に関する覚書」『研究紀要』第 6 号三重県埋蔵文化財センター
新田剛 1998「長者屋敷遺跡発掘調査概要（9 次）」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報』Ⅴ

ISE KOKUFU SITE PRELIMINARY REPORT - 1999 -

Contents

Introductory Remarks		Chapter V . Conclusions	
Chapter I . The History of Excavations and Studies on Ise Kokufu Site	... 1	1. Construction among Structural Features	... 13
Chapter II . Method and Progress of the Fieldwork	... 2	2. Plan of Buildings	... 13
Chapter III . Structural Features		3. Relation between the Pottery and Structural Features	... 15
1. Standard Layers at the Excavated Area	... 3	4. Dating of the Structural Features from the Ordering of the Pottery Types	... 16
2. Buildings	... 3	5. Study on the Roof Tiles	... 18
3. Pits	... 4	6. Comparison between the building at Nagatsuka Zone and the others	... 18
4. Moats	... 5	7. Structure and Settlement of Ise Kokufu Site	... 19
Chapter IV. Artifacts		8. Problems and Aims	... 19
1. Pottery	... 6	Contents	
2. Roof Tiles	... 6	Summary	
3. Other Artifacts	... 7		
4. Types of Eaves Tiles	... 7		

Colour Plates

- | | |
|---|--|
| 1. Upper; Roof Tiles Found in Moat (SD23) | 2. Upper; Buildings (SB44 and SB47) |
| Lower; Eaves Roof Tiles Found in Pit (SK24) | Lower; Eaves Roof Tiles Found in Moat (SD41) |

Figures

- | | | |
|---|-------------------------------------|--------|
| 1. Excavation Grid in the 1997 Fiscal Year | 5. Types of Round Eaves Tiles | ... 9 |
| 2. Subdivided Grid | 6. Types of Flat Eaves Tiles | ... 10 |
| 3. Excavation Grid in the 1998 Fiscal Year | 7. Plan of Buildings | ... 14 |
| 4. Elevation from the Building (5B27) to the Moat
(SD23) | 8. Pottery Found at Ise Kokufu Site | ... 17 |
| ... 5 | | |

Tables

- | | | |
|--|--|--------|
| 1. The Seat and Area of Excavations | 5. Types of Flat Eaves Tiles | ... 11 |
| 2. Structural Features Found in each Fiscal Year | 6. Quantity of Eaves Tiles by Excavated Points | |
| 3. Pottery | 7. Abstract | ... 12 |
| 4. Types of Round Eaves Tiles | | ... 65 |
| ... 11 | | |

Plates

1 . Other Sites around of Ise Kokufu	...	23	Aerial Photograph of 10th Excavated Area	...	49
2 . Location of Excavated Area	...	24	25. Roof Tiles of Fallen Building Found at SD23	...	50
3 . Location of Excavated Area	...	25	26. Roof Tiles of Fallen Building Found at SD23	...	51
4 . Section of SB27 and SD23	...	26	27. Building (SB27) / Roof Tiles Found at SK24	...	52
5 . Layout of Structural Features	...	27	28. Roof Tiles Found at 5K24 , 5K25 and 5D21 /	...	53
6 . Plan of SB27, SD23, SD21, SD22, SK24 and SK25	...	29	Roof Tiles Found at SD23	...	53
7. Plan and Section of SD26 and SD36	...	31	29. Photograph of Field Work at SD23 / Small Pits (SP29) of Scaffolding Poles / Field Trips /	...	54
8. Section of SB44 and SB47	...	32	Section of SD26 / The Foundation of Building (SB27) / Section of SD23 / Section of SD23	...	54
9. Plan and Section of SB40, SB44, SD41, SD42, SD43 , SD41 , SD42 and Small Pits of Scaffolding Poles	...	33	30. Roof Tiles Found at 5D41 / Roof Tiles Found at SD41	...	55
10. Plan and Section of SB47, SK56, SD55 and Small Pits of Scaffolding Poles	...	35	31. Roof Tiles Found at SK57 / Section of SK56	...	56
11. Plan and Section of SK57 and SD58	...	36	32. Plan of SK57 / Plan of SD23	...	57
12. Plan and Section of SK24, SD23 and SD21	...	37	33. Section of SD23 / Plan of SKS6 and SD55	...	58
13. Section of SK24 , SD23 and SD21	...	38	34. Plan of SD41, SD42 and SD43 / Plan of SB44 and SB47	...	59
14. Roof Tiles of Fallen Building Found at SD23	...	39	35. Plan of SD23 and 5D21 / Plan of SD21	...	60
15. Roof Tiles Found at SK24 and SD41	...	40	36. Pottery	...	61
16. Pottery	...	41	37. Pottery and Round Eaves Tiles	...	62
17. Round Eaves Tiles	...	42	38. Flat Eaves Tile	...	63
18. Flat Eaves Tile	...	43	39. Round Roof Tiles , Flat Roof Tile , Stamped Roof Tiles and Ornamental Ridge-end Roof Tiles	...	64
19. Flat Eaves Tile	...	44			
20. Flat Eaves Tiles	...	45			
21. Ornamental Ridge-end Roof Tiles	...	46			
22. Round Roof Tiles and Stamped Roof Tiles	...	47			
23. Flat Roof Tile and Stamped Roof Tiles	...	48			
24. Aerial Photograph of 8th Excavated Area	...				

Summary

Ise kokufu site, also called Chouja-yashiki site, is located at the left terrace of the Anraku River and annexed to Hirosecho, Suzukacity, Mie Prefecture, Japan. Kokufu is provincial capital in the Nara and Heian era. Suzuka board of education has excavated this site since the 1992 fiscal year and found kokucho provincial government centre and the other governmental offices . Most of these buildings are considered to be constructed on the earthen platform, supported by pillars built on the foundation stones, and roofed with tiles. It is hypothesized the ceremonies were performed and banquets were gave at kokucho.

We had excavations at Nagatsuka point of Ise kokufu site in the 1997 and 1998 fiscal years and found remains of 4 buildings, 11 moats, 4 garbage pits and many small pits of scaffolding poles, and dug many roof tiles; round roof tiles, flat roof tiles , round eaves tiles , flat eaves tiles , ornamental ridge-end tiles and stamped roof tiles, a little hajiki and sueki pottery and iron slugs out of ground. These remains are regarded as a kind of governmental office in the Nara and Heian era, which have the systematic arrangement of buildings.

It is most important result that roof tiles of fallen building were found in the large moat named SD23 (PL.6 and 14) . This moat is some 9 meters in width. Flat roof tiles were laid down in 23 rows of a few or ten odd. It is inferred that the source of these tiles is building named SB27 (PL.6) , because the narrow end of them faced to the east. This building seems to have blown down by the disaster. For the pottery dug from garbage pits is dated to about the end of the 8th century or the beginning of the 9th, the buildings has fallen into ruins in the early stage of Heian era at latest and Ise kokufu provincial capital seems to have moved out then.



周辺の遺跡 (縮尺 1 : 100,000)

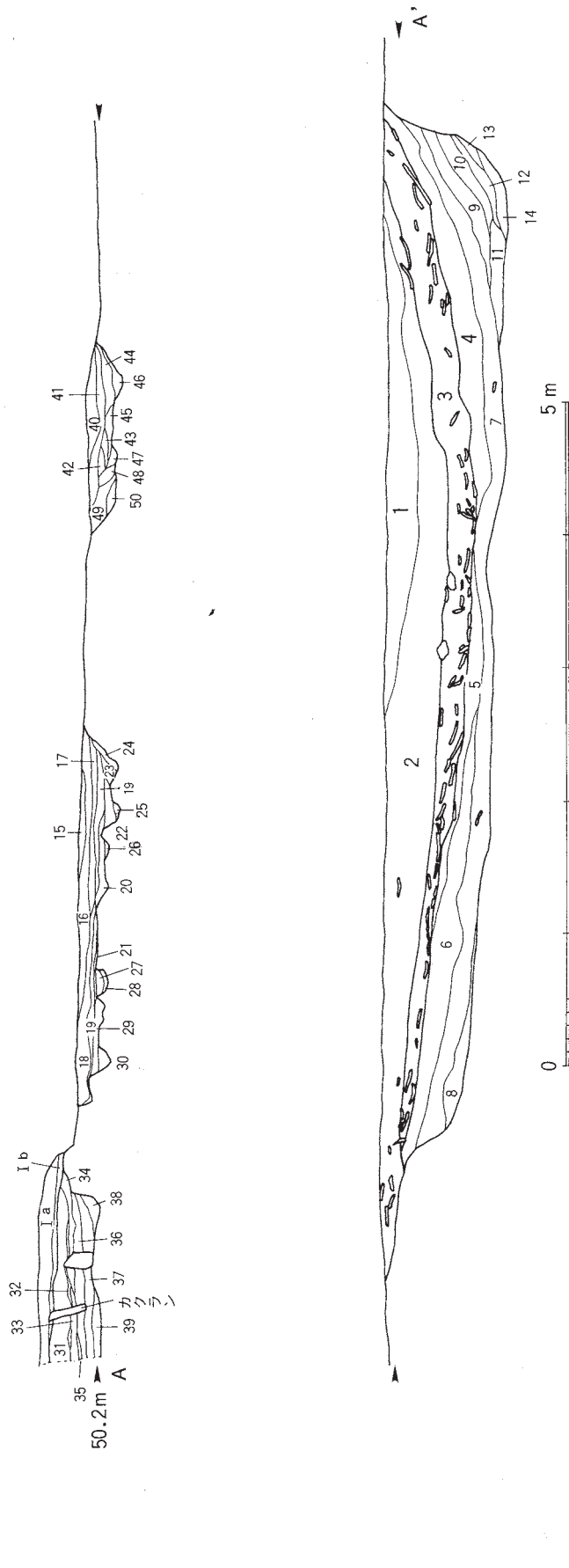
1. 伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡) 2. 観音沖遺跡 3. 推定鈴鹿関跡 4. 切山瓦窯跡 5. 古厩遺跡 6. 大鼻遺跡 7. 八野遺跡・八野瓦窯跡
8. 国府 A 遺跡 9. 三宅神社遺跡 10. 天王山西遺跡 11. 津賀平遺跡 12. 岡田遺跡 13. 川原井瓦窯跡 14. 山の原遺跡 15. 山辺瓦窯跡
16. 須賀遺跡 17. 天王遺跡 18. 伊勢国分寺跡 (推定僧寺跡) 19. 狐塚遺跡 (河曲郡衙跡) 20. 国分遺跡 (推定尼寺跡) 21. 木田坂上遺跡



調査区位置図 (1 : 5,000)



調査区位置図 (1 : 1,000)



I a. 表土

I b. 表土が硬化した層

SD23 近世以降の埋土

1. 黒褐色 10YR3/2. 褐色 10YR4/4・黒色 10YR2/1 を斑状に含む

2. 黒褐色 7.5YR3/2. 褐色 10YR4/4 混入

SD23 建物倒壊時以降の埋土

3. 黒褐色 7.5YR2/2. 建物倒壊時及びそれ以降の堆積

SD23 建物倒壊前の埋土

4. 褐色 10YR4/4. 黒色 10YR2/1 の細かいブロック混入

5. 極暗褐色 7.5YR2/3. 腐植土

6. 黒色 10YR2/1

7. 黒褐色 10YR2/2

8. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 7.5YR4/6 焼土と炭化物混入

9. 黒色 10YR2/1. にぶい黄褐色 10YR5/4 粒子混入

10. 黒褐色 10YR2/3. 暗褐色 10YR3/4 混入

11. 黒色 10YR2/1

12. 黒褐色 10YR2/3. 暗褐色 10YR3/4 少量混入

13. 黄褐色 10YR5/6. しまりある

14. 黒色 10YR1.7/1

SB27 掘込地形埋土

15. 暗褐色 10YR3/3. 褐色 10YR4/4 混入

16. 黒色 10YR2/1. 黄褐色 10YR5/6・褐色 10YR4/4 混入

17. 黒色 10YR1.7/1

18. 黒褐色 10YR2/2. 褐色 10YR4/4 混入

19. 黒色 10YR1.7/1

20. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4 混入

21. 黒色 10YR1.7/1

22. 黒褐色 10YR3/2

23. 暗褐色 10YR3/3. 褐色 10YR4/4 混入

24. 黒褐色 10YR2/3.

25. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4 混入

26. 黒色 10YR2/1

27. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4・黒褐色 10YR2/2 混入

28. 黒褐色 10YR2/2

29. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4・黒褐色 10YR2/2 混入

30. 暗褐色 7.5YR3/3. 褐色 10YR4/4 混入

31. 黒褐色 10YR2/2. 褐色 10YR4/4 の細かいブロック混入

32. 黒褐色 10YR3/2. 暗褐色 10YR4/3 の細かいブロック混入

入

33. 黒色 10YR2/1

34. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4 の細かいブロック混入

35. 暗褐色 10YR3/4

36. 黒色 10YR2/1. にぶい黄褐色 10YR4/3 の細かいブロック混入

37. 黒褐色 7.5YR2/2. 褐色 10YR4/6 の細かいブロック混入

38. 黒褐色 7.5YR2/2. 褐色 10YR4/6 斑状に多く含む

39. 黒褐色 7.5YR2/2. 褐色 10YR4/6 斑状に多く含む

40. 黒色 10YR2/1. 暗褐色 10YR3/4 混入

41. 黒褐色 10YR2/2. 黒色 10YR2/1・褐色 10YR4/4 混入

42. 黒色 10YR2/1

43. 黒褐色 10YR2/3・

44. 暗褐色 10YR3/3

45. にぶい黄褐色 10YR4/3. 黒褐色 7.5YR2/2・褐色 10YR4/4 混入

46. 黒褐色 10YR2/3. 褐色 10YR4/4 混入

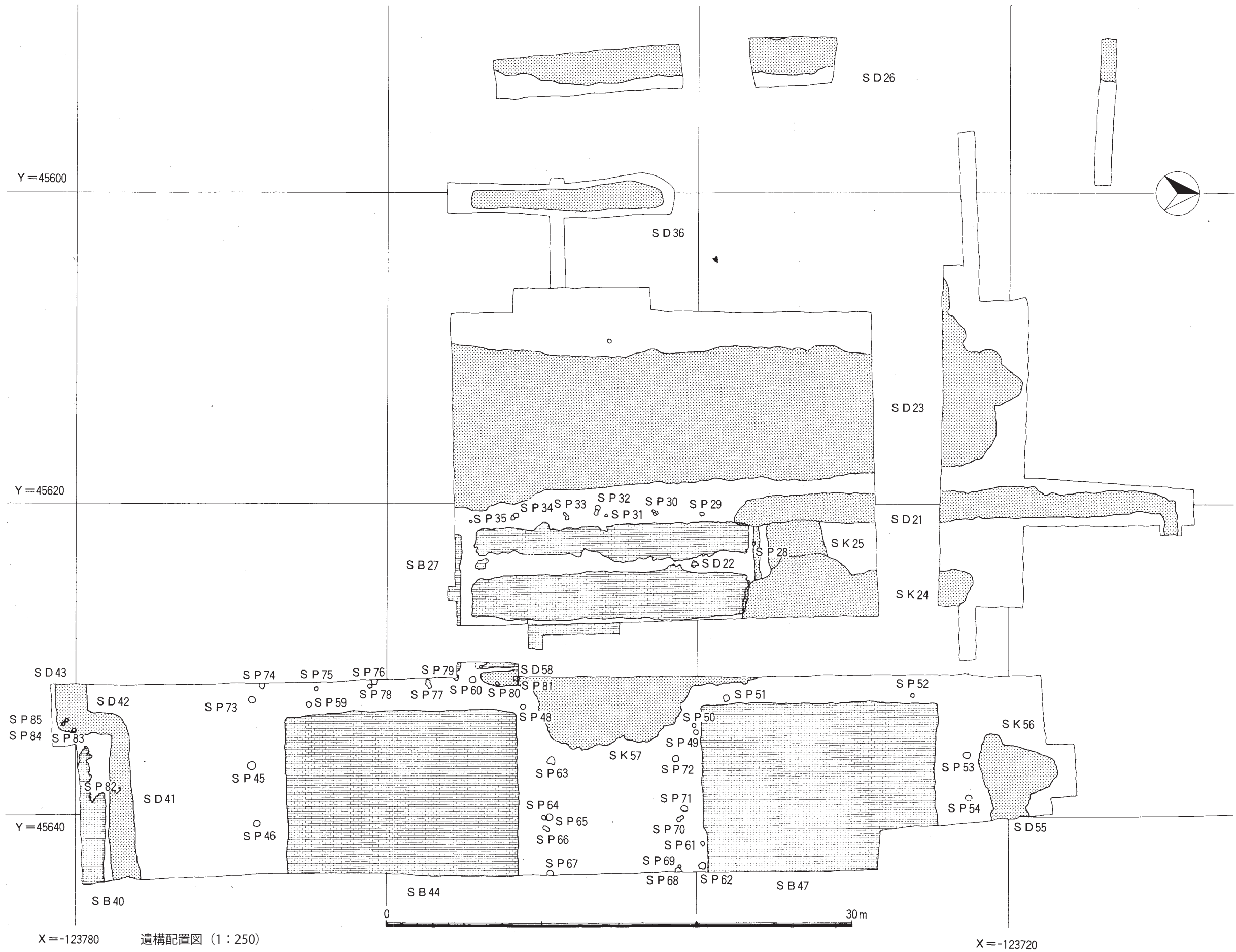
47. 暗褐色 10YR3/4. 黒褐色 10YR2/2 混入

48. 暗褐色 10YR3/4

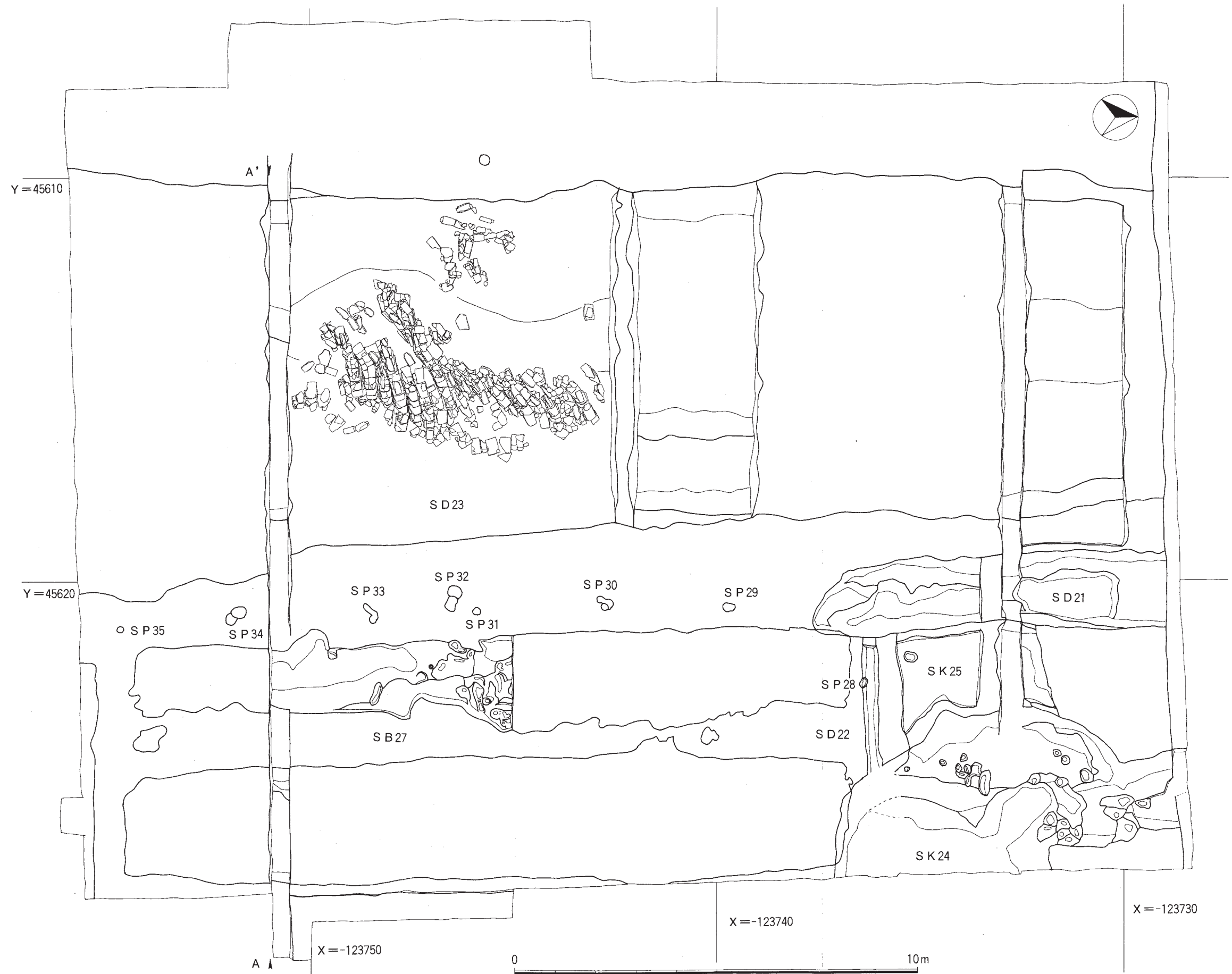
49. 暗褐色 7.5YR3/3

50. 暗褐色 10YR3/4

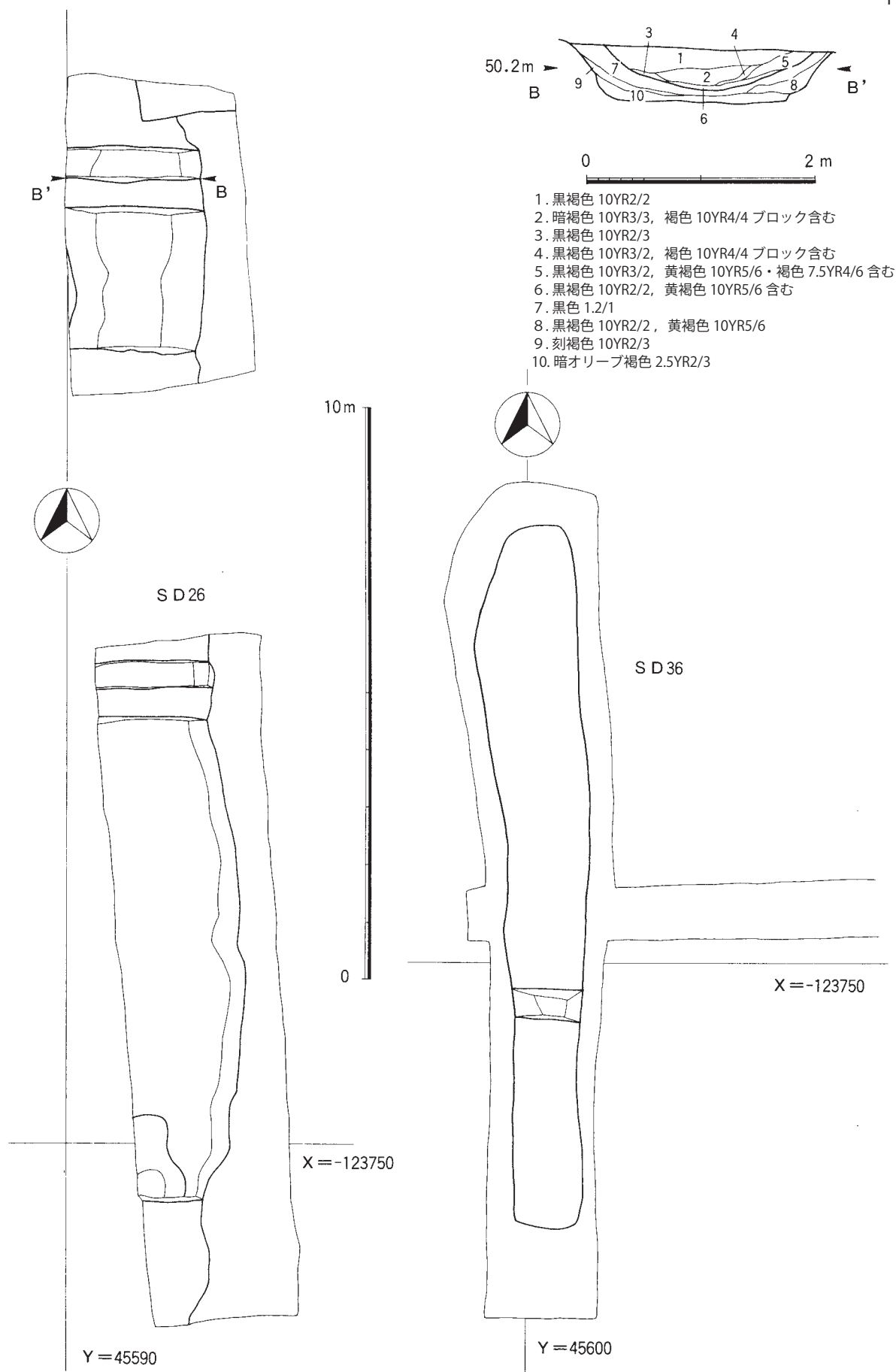
建物SB 27・大溝SD 23 土層断面図 (1:50)



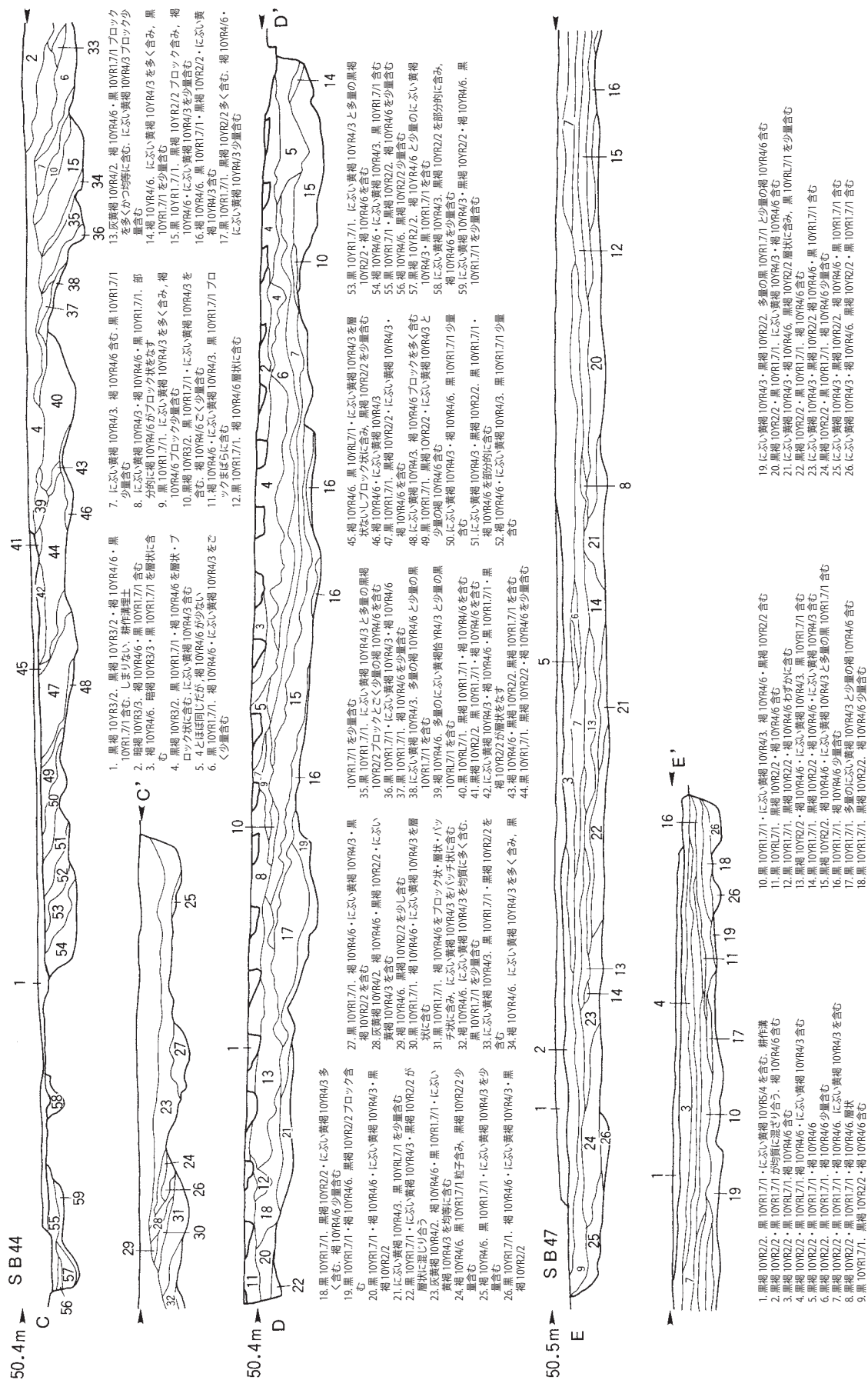
遺構配置図 (1 : 250)



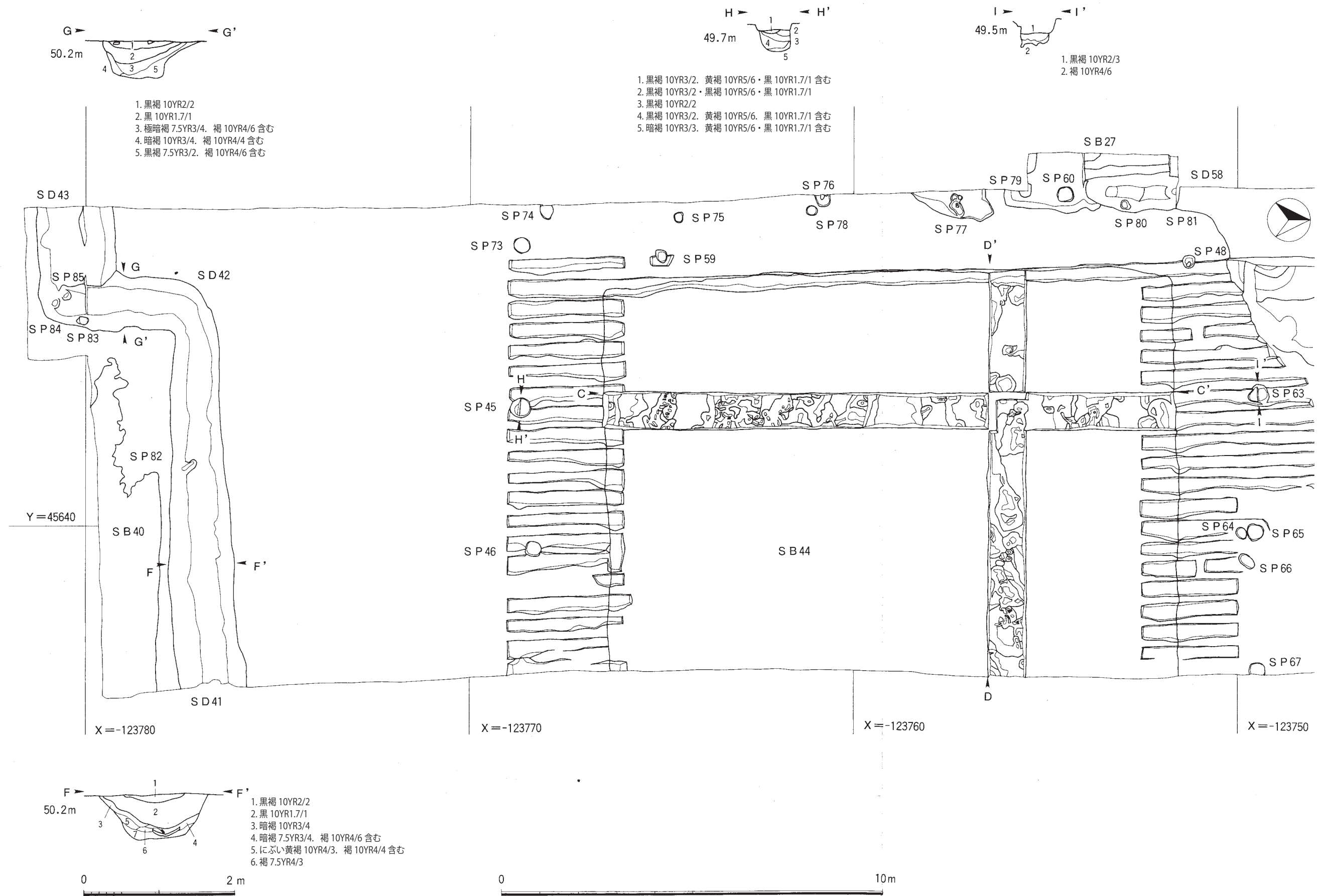
建物SB 27・土坑SK 24・25・大溝SD 23・溝SD 21・22 平面図 (1:100)



溝S D26・36 平面図（縮尺 1:100）・溝S D 26 土層断面図（縮尺 1:50）

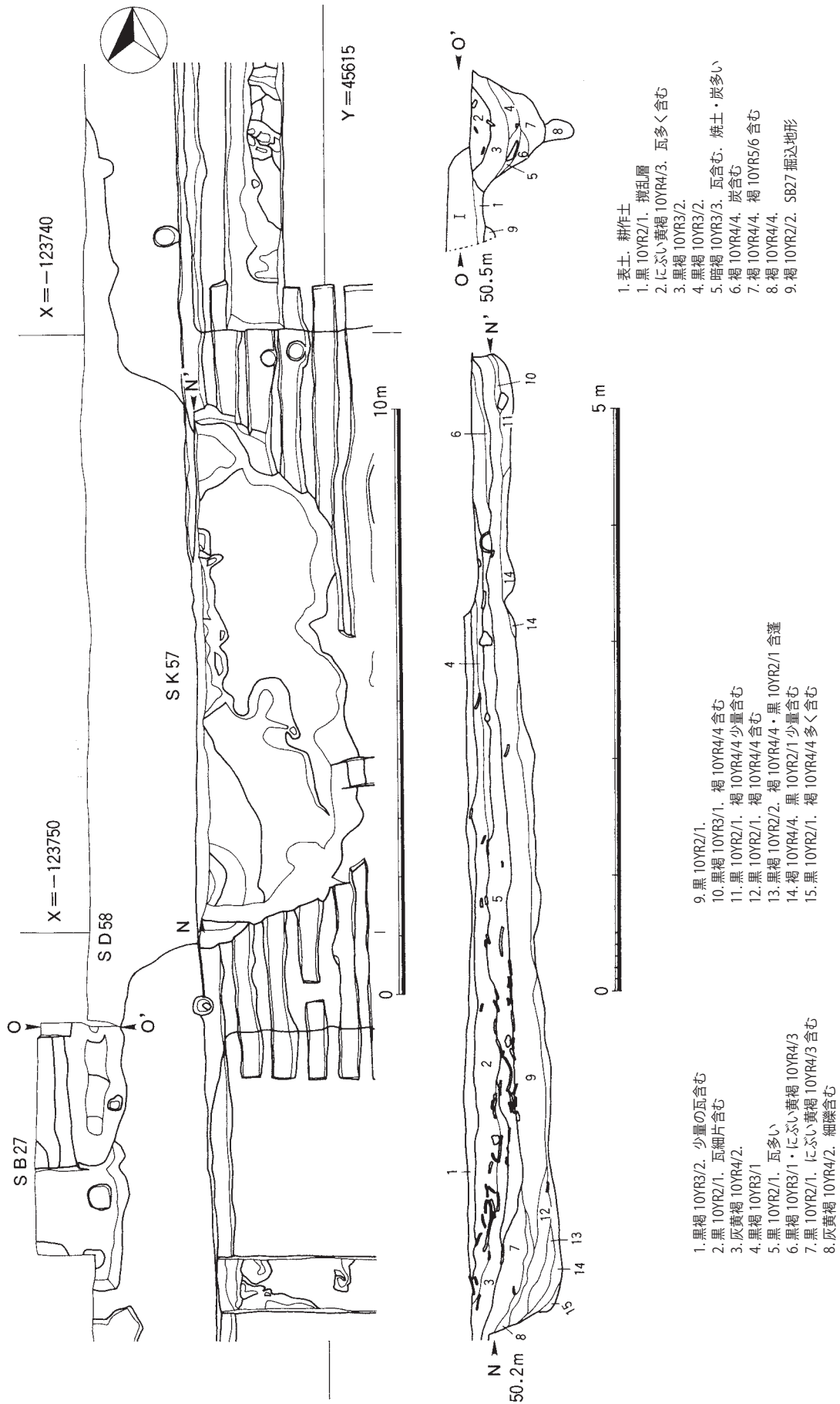


建物 SB44・47 土層断面図 (1:50)

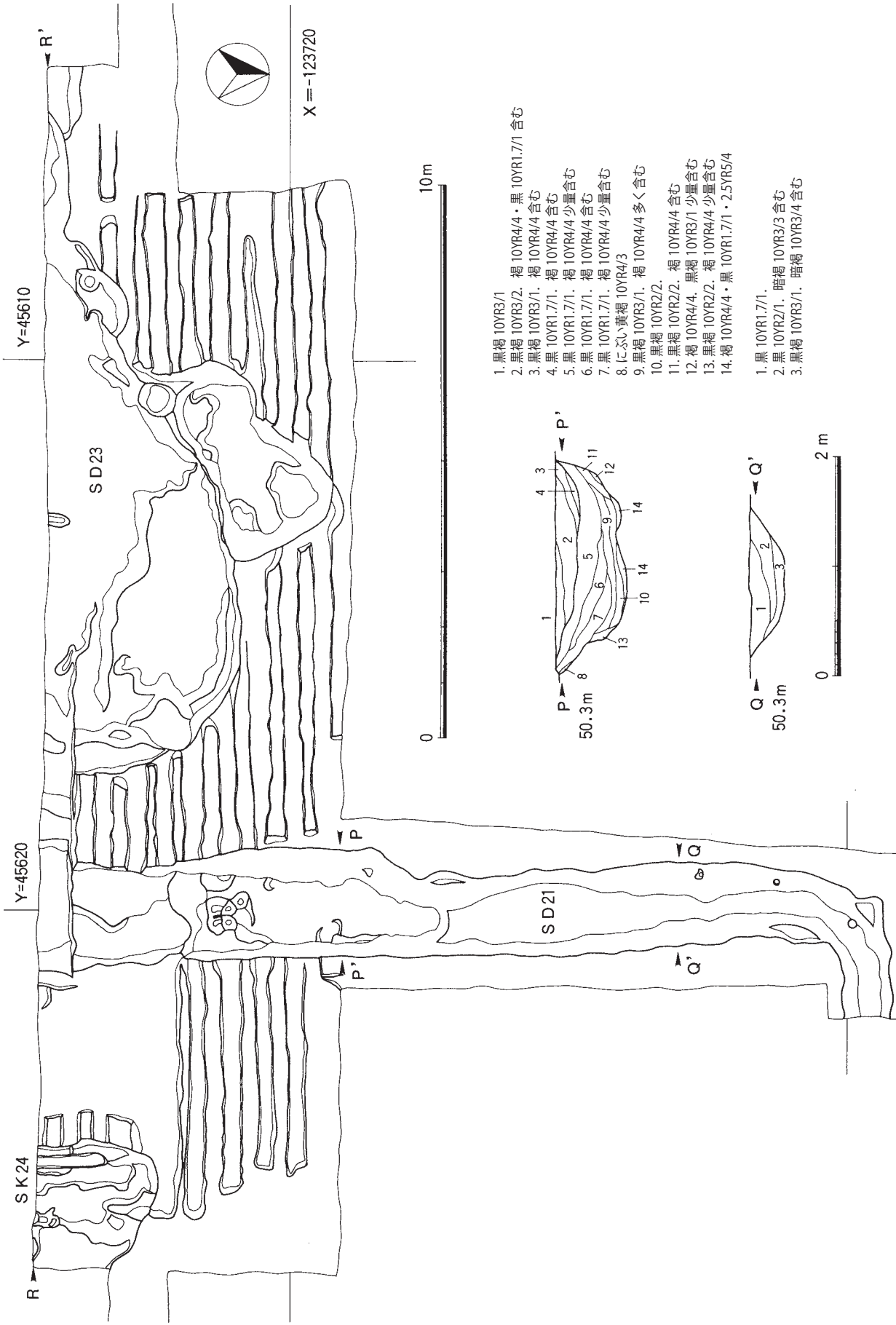


建物 S B 40・溝 S D 41～43・足場穴平面図 (1:100)・溝 S D 41・42・足場穴土層断面図 (1:50)

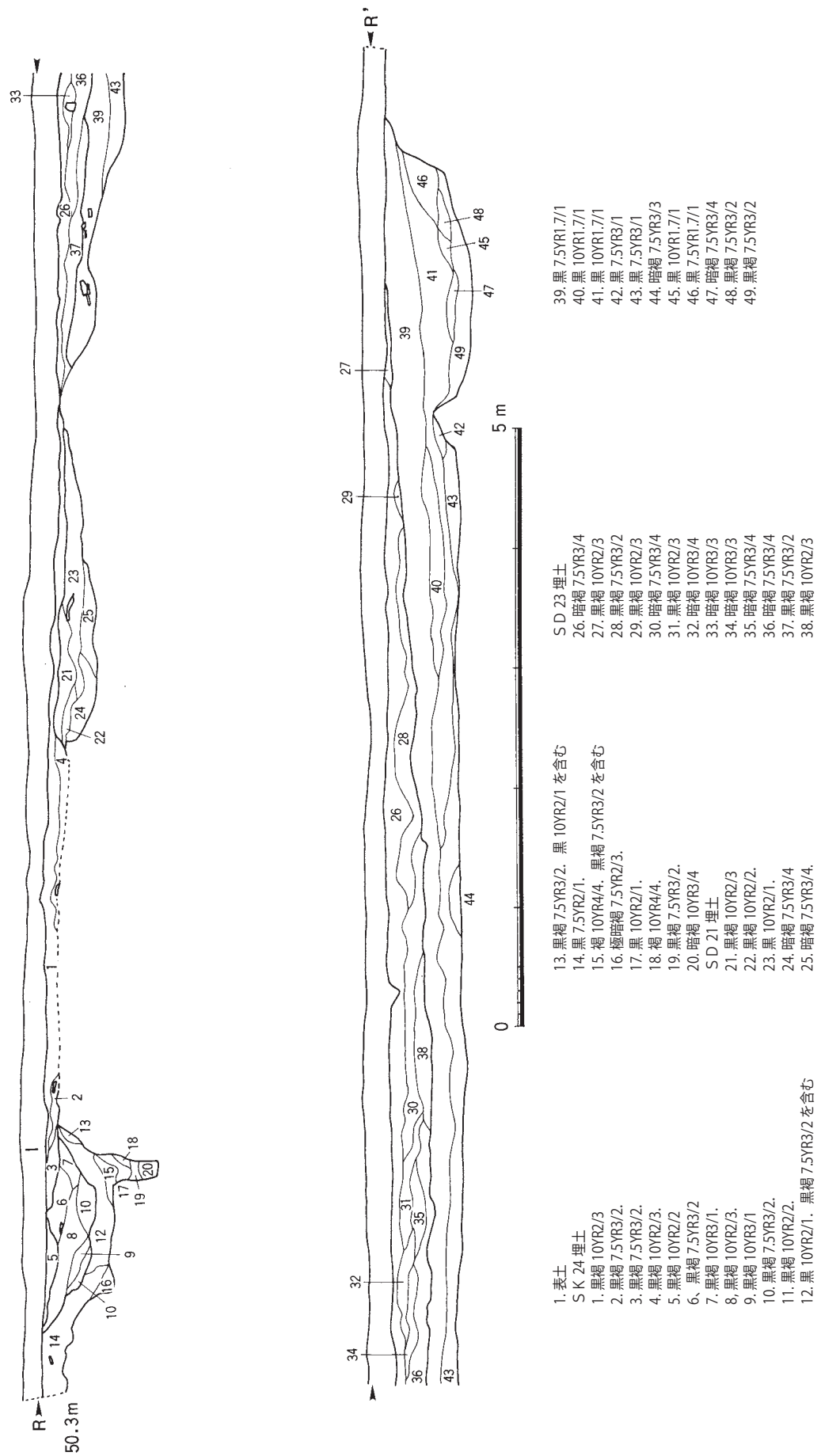




土坑 SK57・溝 SD58 平面図 (1:100)・土層断面図 (1:50)



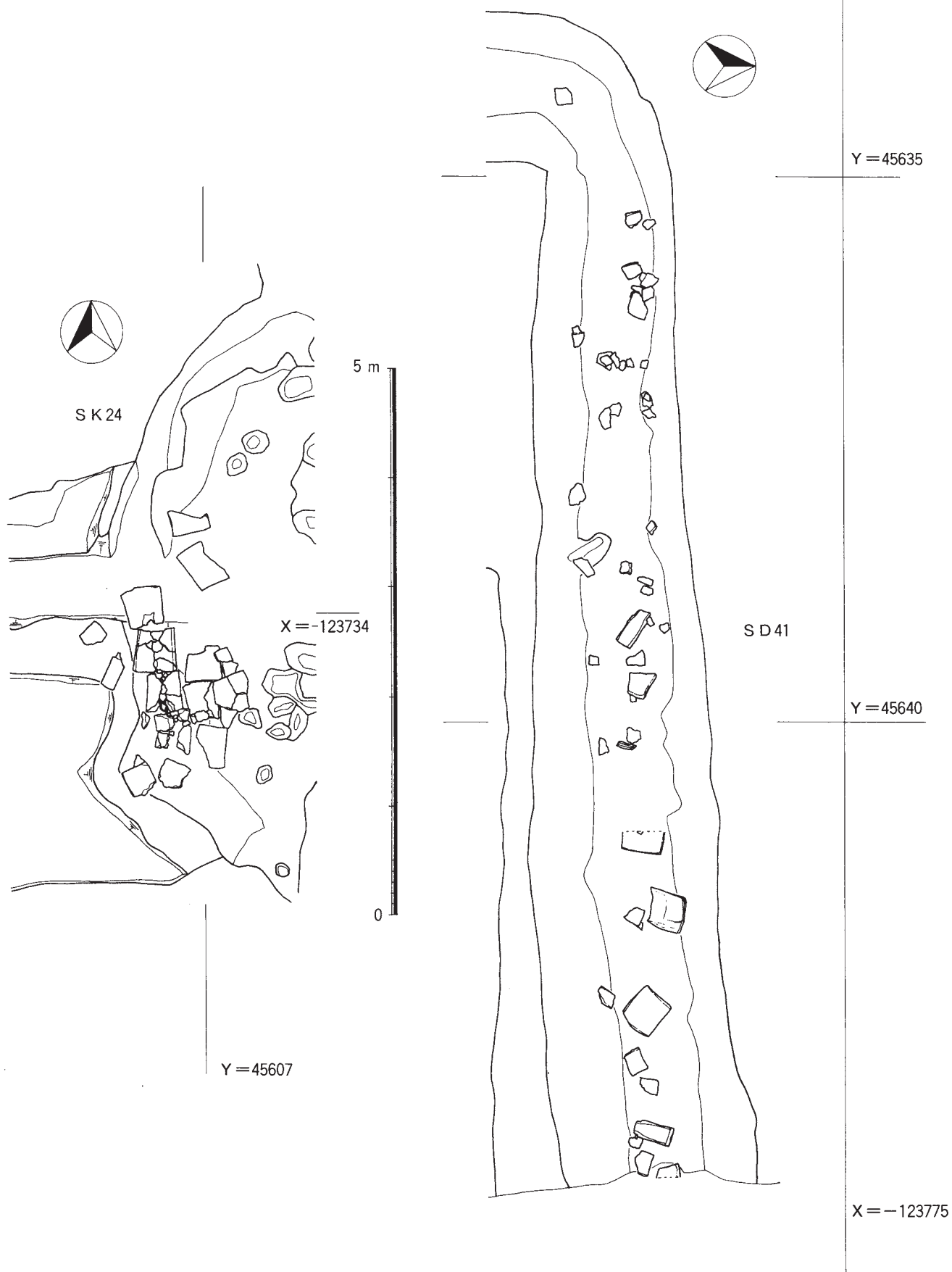
土坑 SK24・溝 SD21 平面図 (1:100)・溝 SD21 土層断面図 (1:50)



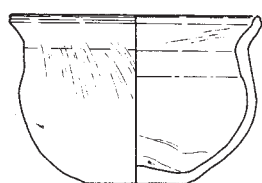
土坑 SK24・溝 SD23・溝 SD21 土層断面図 (1 : 50)



大溝 SD23 倒壊瓦出土状況 (1 : 40)



土坑SK 24・溝SD 41 瓦出土状況 (1 : 50)



1 ※



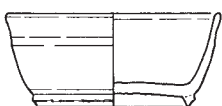
2



3



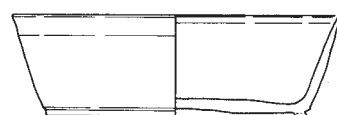
4



5



6



7



8



9



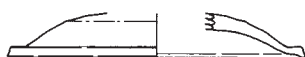
10



11



12



13



14



15



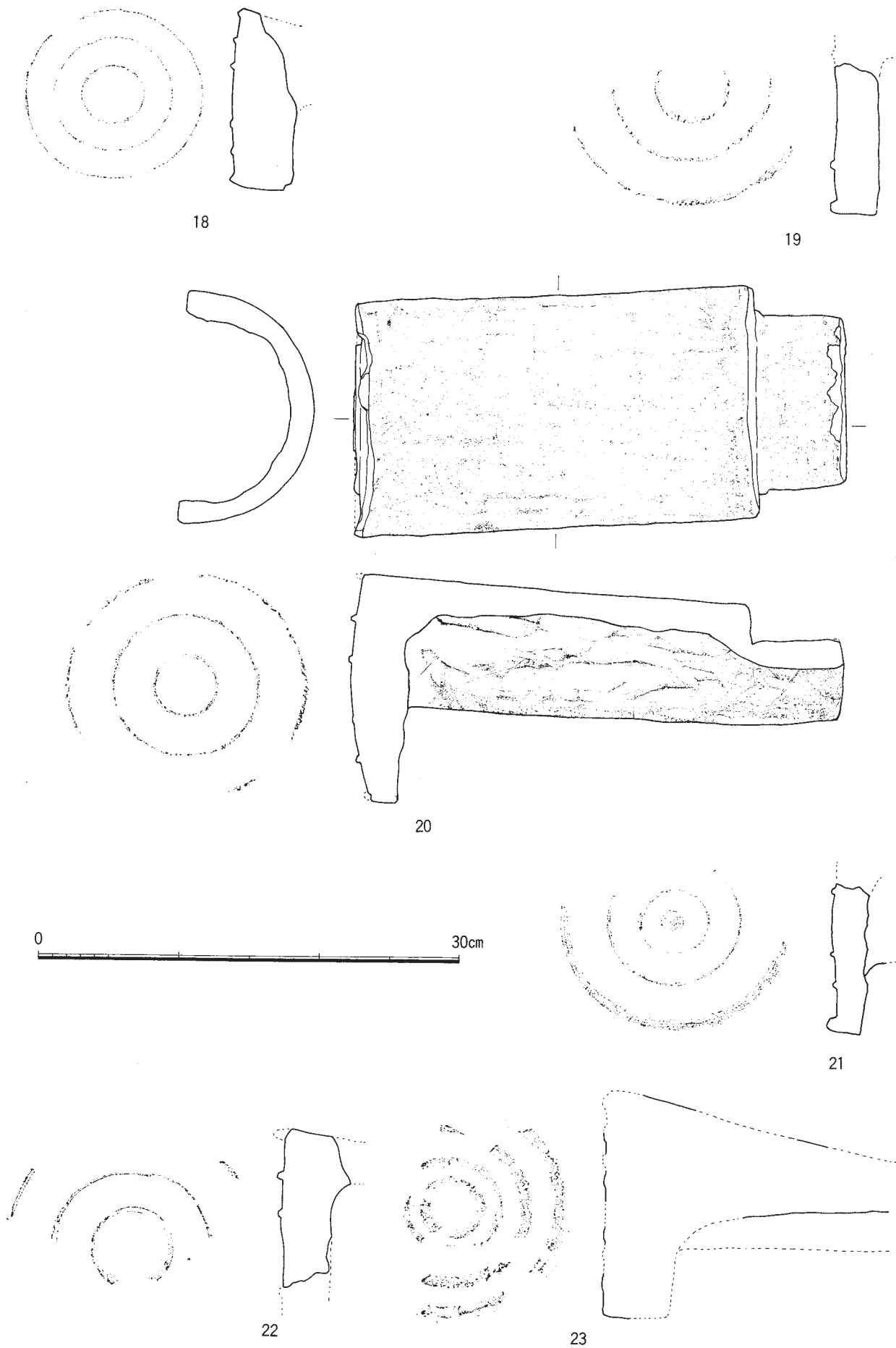
16



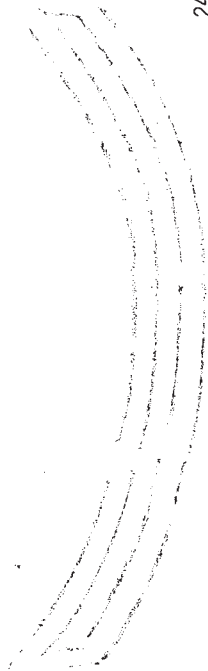
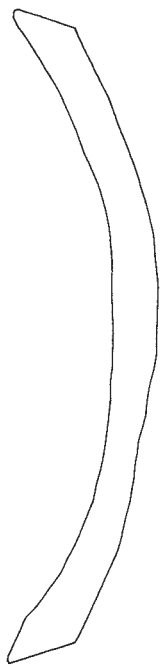
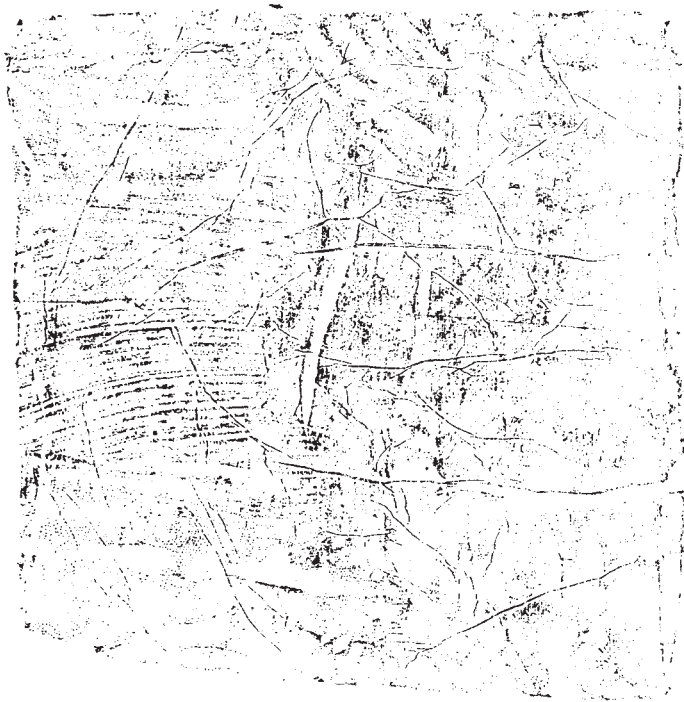
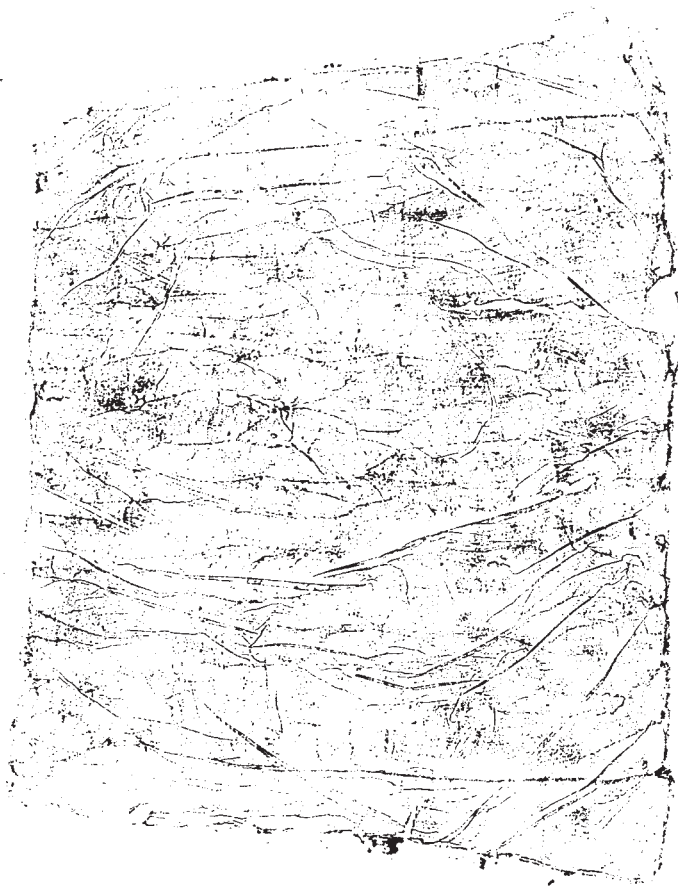
17

土器 (1 : 4)

※は土師器。出土場所は 8 頁 Tab.3 のとおり。



軒丸瓦 (1 : 4) (SK 57 : 21・23, SD 23 : 18・19・22, SD 41 : 20)



24

軒平瓦 (1 : 4) (SD 41 : 24)



30cm

0

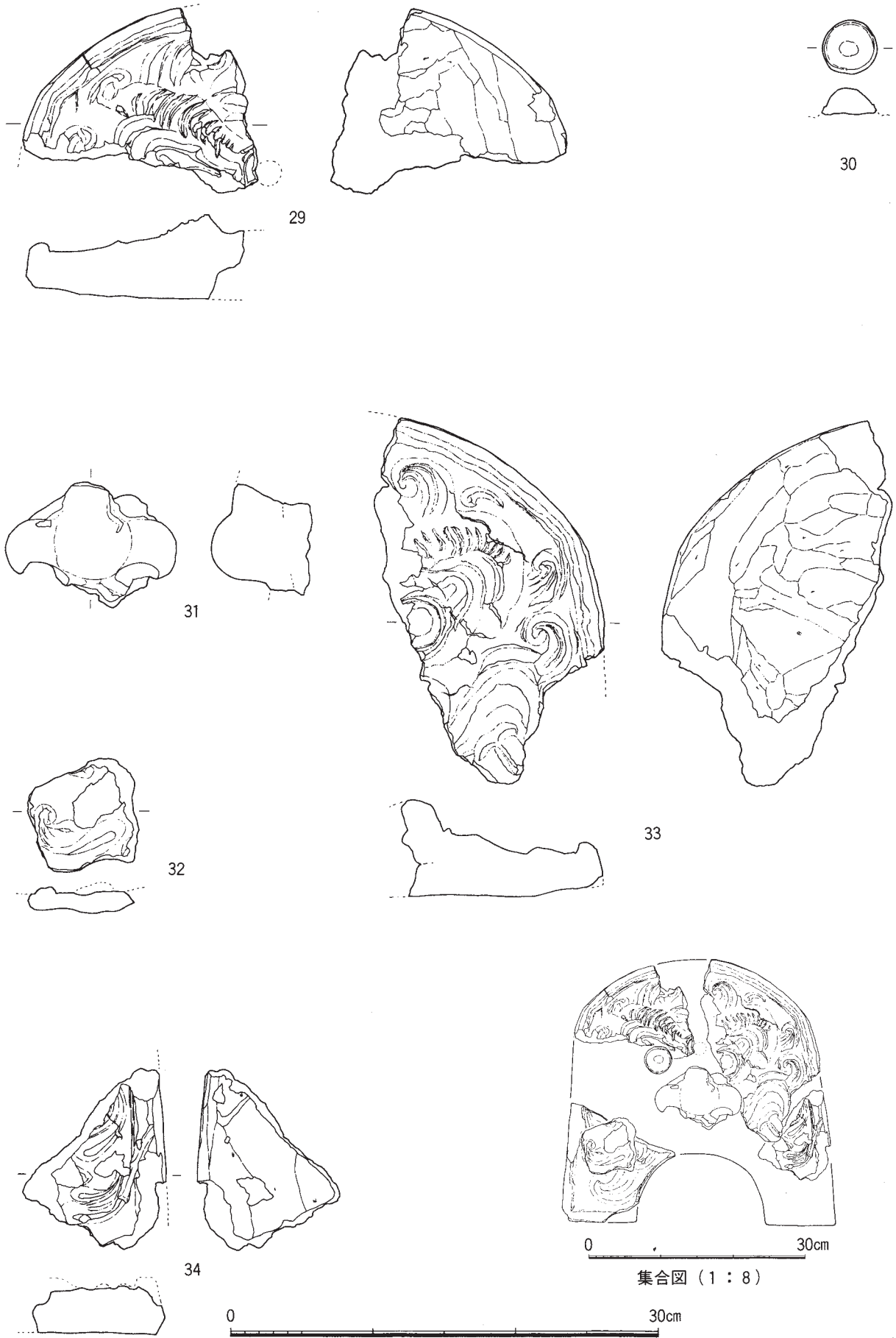


25

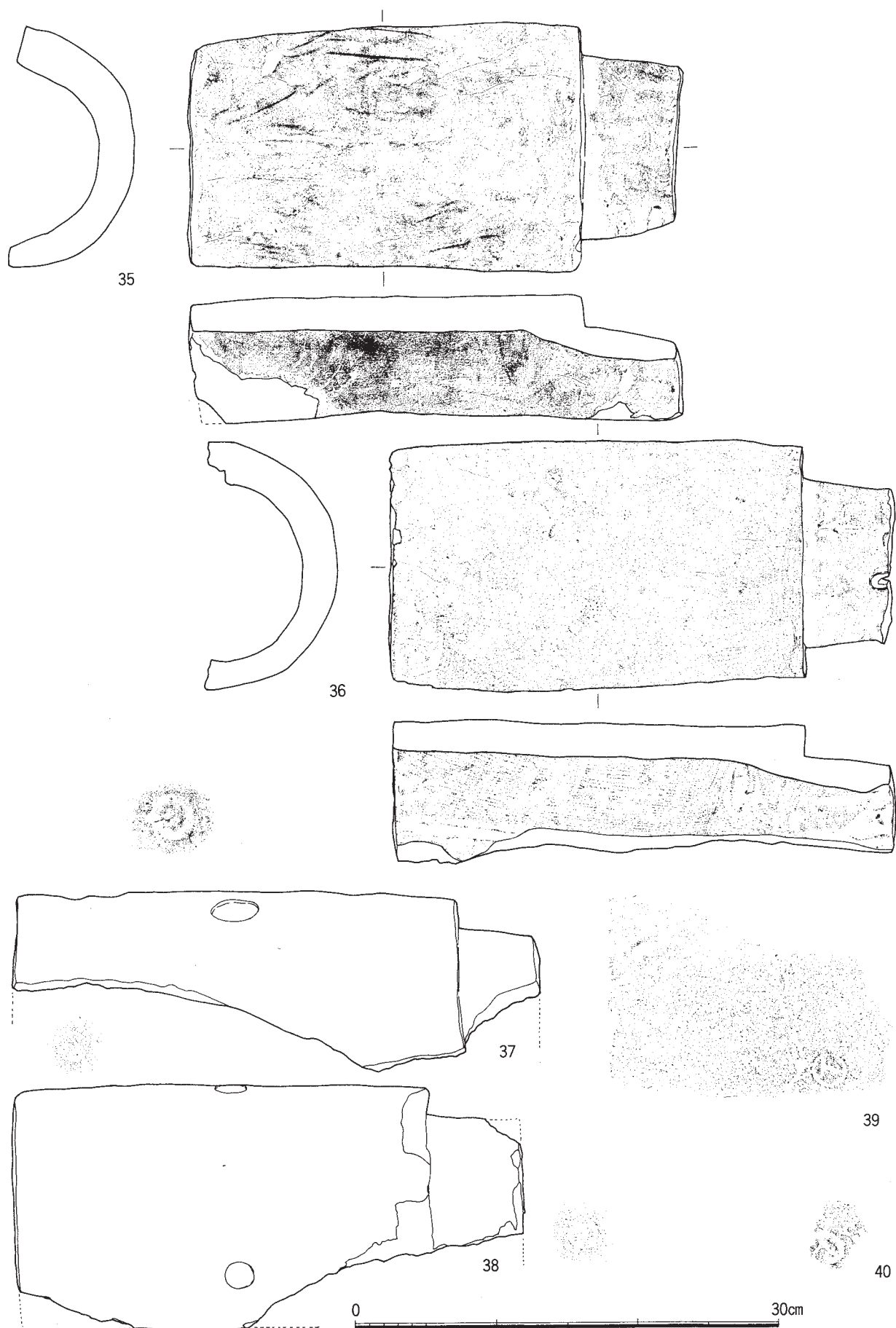
軒平瓦 (1 : 4) (S K 24 : 25)



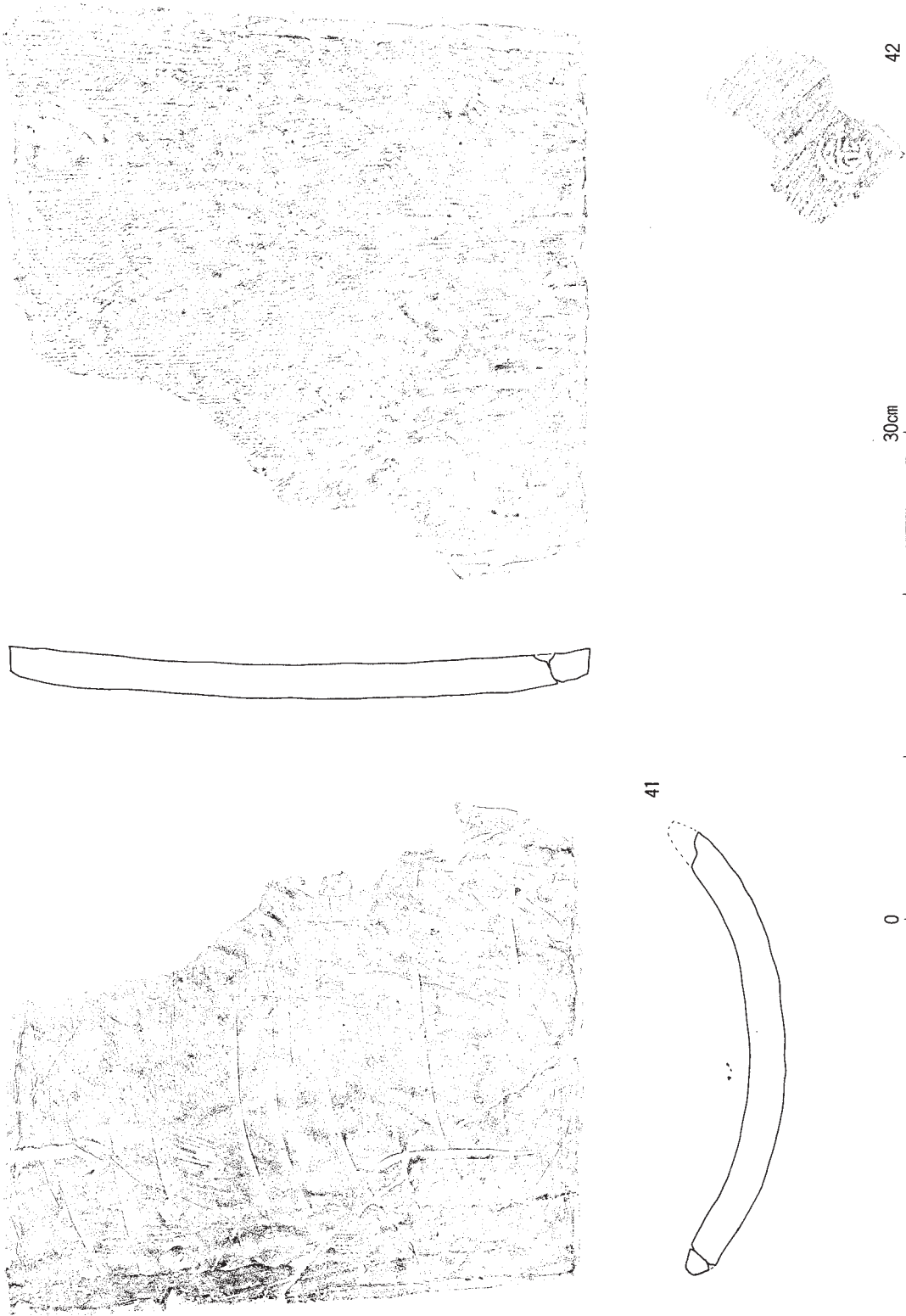
軒平瓦 (1:4) (SK 24:27, SK 57:28, SD 41:26)



鬼瓦 (1 : 4) (SK 57 : 29・30・32・34, SD 23 : 31, SD 41 : 33)



文字瓦 (1:4) (SK 57:37~39, SD 21:36, SD 41:35)



平瓦・文字瓦 (1 : 4) (SD 43 : 41, 表土 : 42)



第 8 次調査区全景



第 10 次調査区全景



大溝S D 23 倒壊瓦（東から）



大溝S D 23 倒壊瓦（西から）



大溝S D 23 倒壊瓦（東から）



大溝S D 23 倒壊瓦（東から）



建物 S B 27 (北から)



土坑 S K 24 瓦出土状況 (北から)



土坑 S K 24 瓦出土状況 (北から)



土坑S K 24・25・溝S D 21 瓦出土状況（西から）



大溝S D 23 瓦出土状況（西から）



大溝 S D 23 作業風景（東から）



足場穴 S P 29



現地説明会（西から）



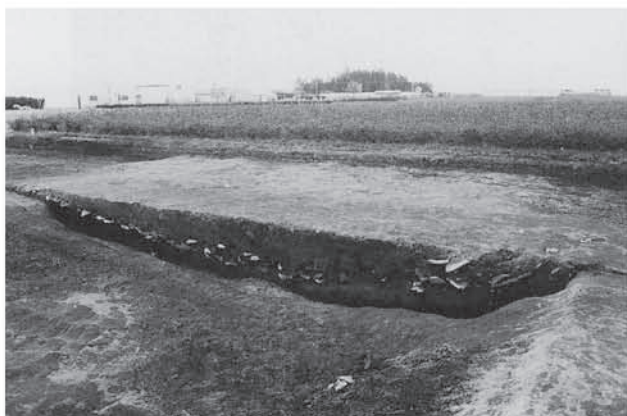
溝 S D 26 土葬断面（北東から）



建物 S B 27 掘込地形（北から）



大溝 S D 23 土層断面（北東から）



大溝 S D 23 作業風景（北西から）



大溝 S D 36 検出状況（南から）



溝 S D 41 瓦出土状況（北から）



溝 S D 41 瓦出土状況（北東から）



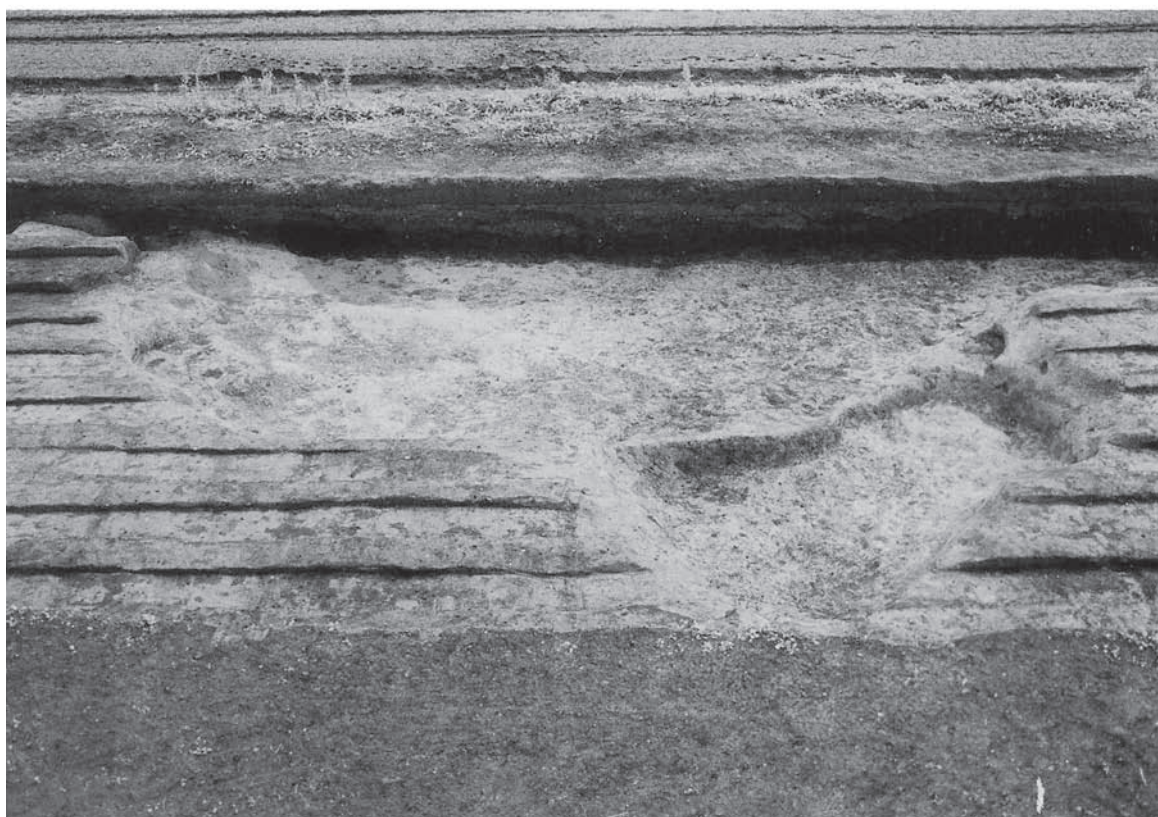
土坑S K 57 瓦出土状況（東から）



土坑S K 57 土層断面（東から）



土坑S K 57 (東から)



大溝S D 23 (北から)



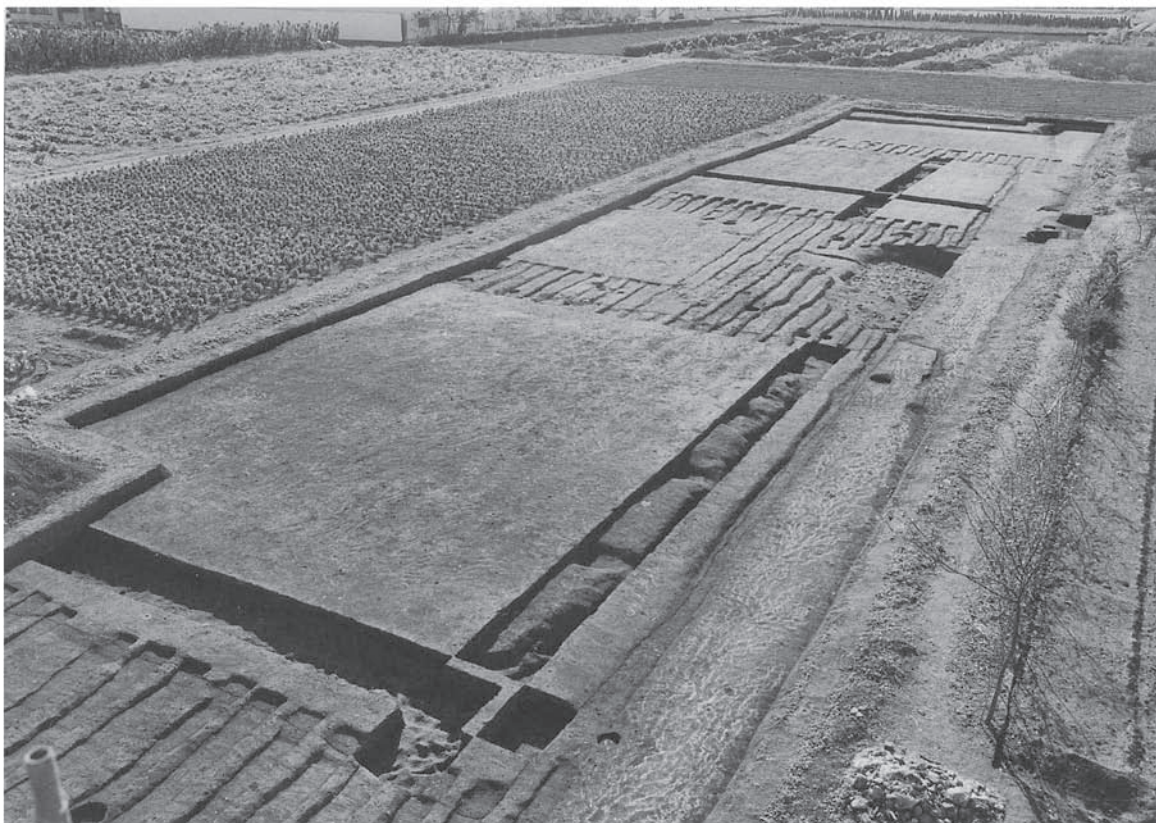
大溝 S D 23 土層断面 (北から)



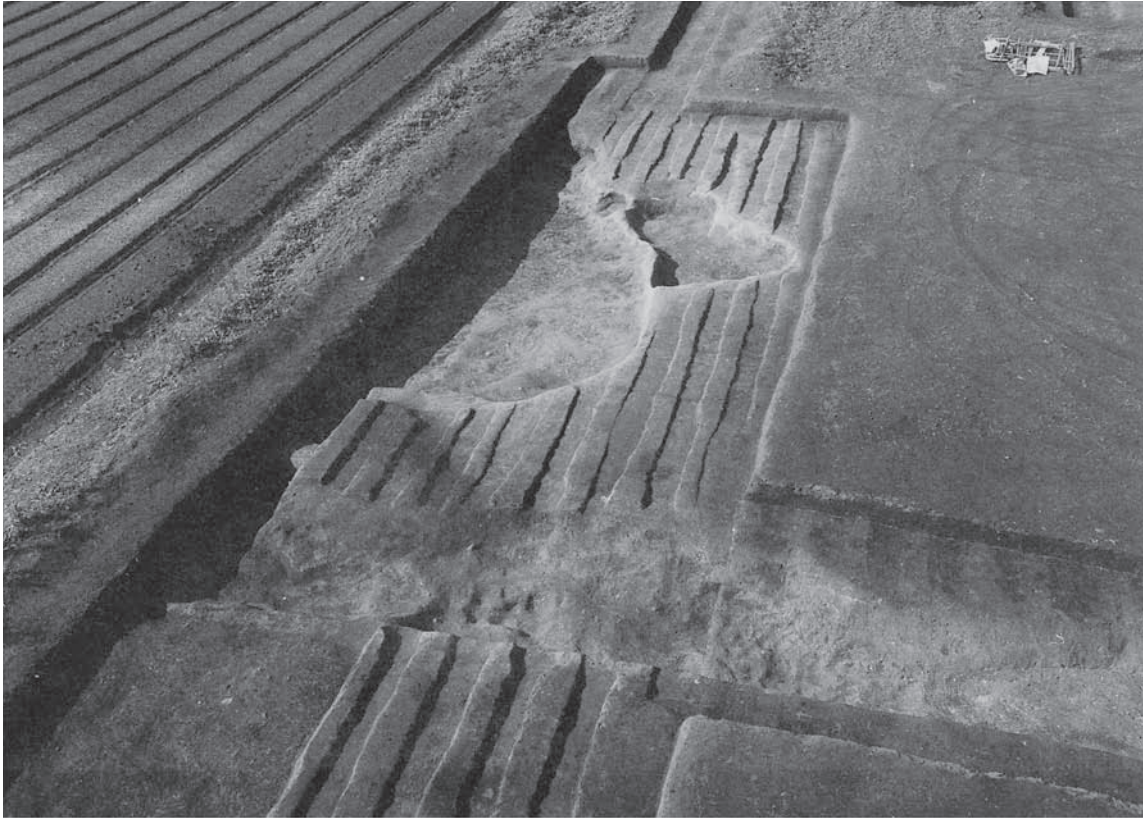
土坑 S K 56・溝 S K 55 (西から)



溝S D 41 ~ 43 (北から)



建物S B 44・47 (北西から)



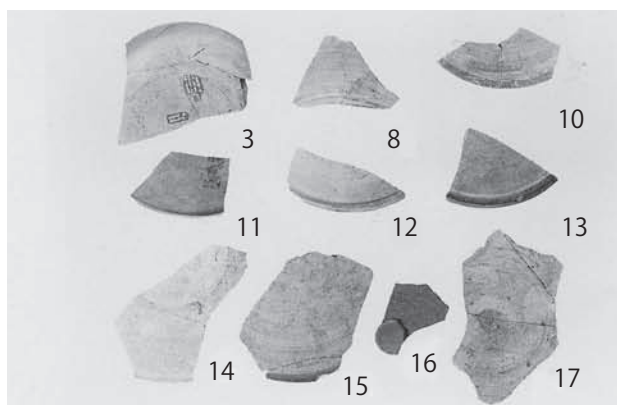
溝SD 23・21 (東から)



溝SD 21 (東から)



土器



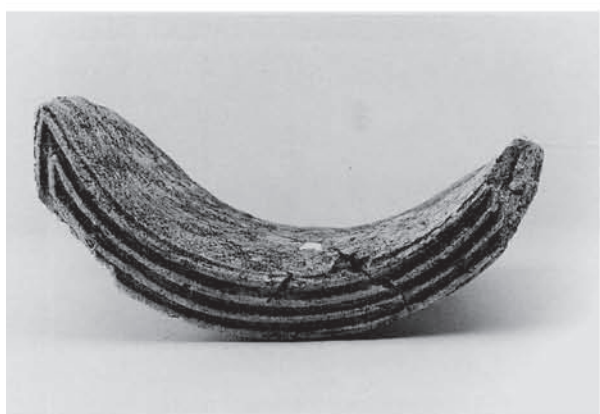
土器・軒丸瓦



24



26



25



27



28



29 ~ 34



41



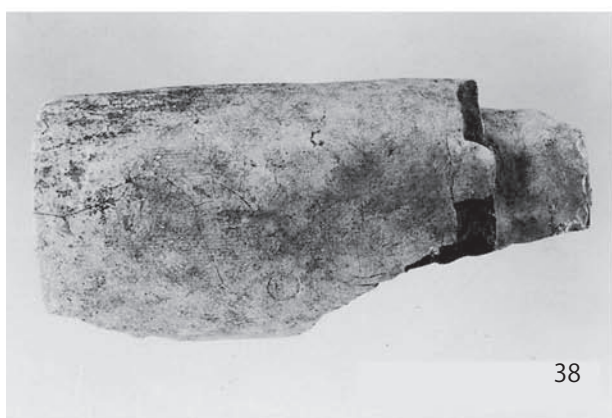
35



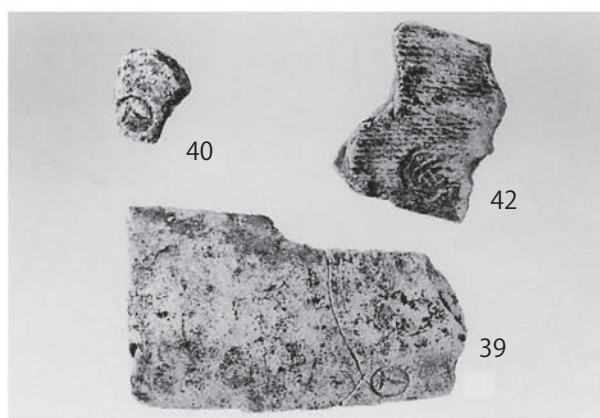
36



37



38



40

42

39

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いせこくふあと									
書 名	伊勢国府跡									
編 著 者 名	いとう ともゆき にった つよし 伊藤 朋之・新田 剛									
編 集 機 関	鈴鹿市教育委員会事務局文化財保護課									
所 在 地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL0593-74-1994									
発 行 年 月 日	西暦 1999 年 3 月 31 日									
所 収 遺 跡 名	所 在 地		コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
	ちよう じゃ や しき 長 者 屋 敷	ひろせ ながつか 広瀬町字長塚 1279 番地の 2		24207	363	34° 53′ 0″	136° 29′ 58″	19971016 ～ 19980210	632 m ²	学術調査
種別		おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特 記 事 項			
官衙		奈良・平安	基礎地形（業）・溝・土坑・足場穴		土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦		第 8 次調査。伊勢国府跡。政庁の北方。葺きあしの保存状態が良好な倒壊瓦とそれらの瓦が葺かれていた建物の基礎地形を検出。			
所 収 遺 跡 名	所 在 地		コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
	長 者 屋 敷	広瀬町字長塚 1279 番地の 3, 1279 番地の 5		24207	363	34° 53′ 0″	136° 29′ 59″	19980901 ～ 19981228	1014.2 m ²	学術調査
種別		おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特 記 事 項			
官衙		奈良・平安	基礎地形（業）・溝・土坑・足場穴		縄文土器・土師器・須恵器・丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・文字瓦・鉄滓		第 10 次調査。伊勢国府跡。政庁の北方。礎石建物の基礎地形を 4 棟分検出。			

伊勢国府跡

発行日	1999年3月31日
編集・発行	鈴鹿市教育委員会 〒513-0801 三重県鈴鹿市神戸九丁目11番11号
連絡先	鈴鹿市考古博物館 〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 0593(74)1994 FAX 0593(74)0986
印刷	早川印刷株式会社 三重県鈴鹿市算所三丁目16番30号 〒513-0806

Ise Kokufu Site

Preliminary Report

March, 1999

Suzuka City Board of Education Mie Pref., Japan